

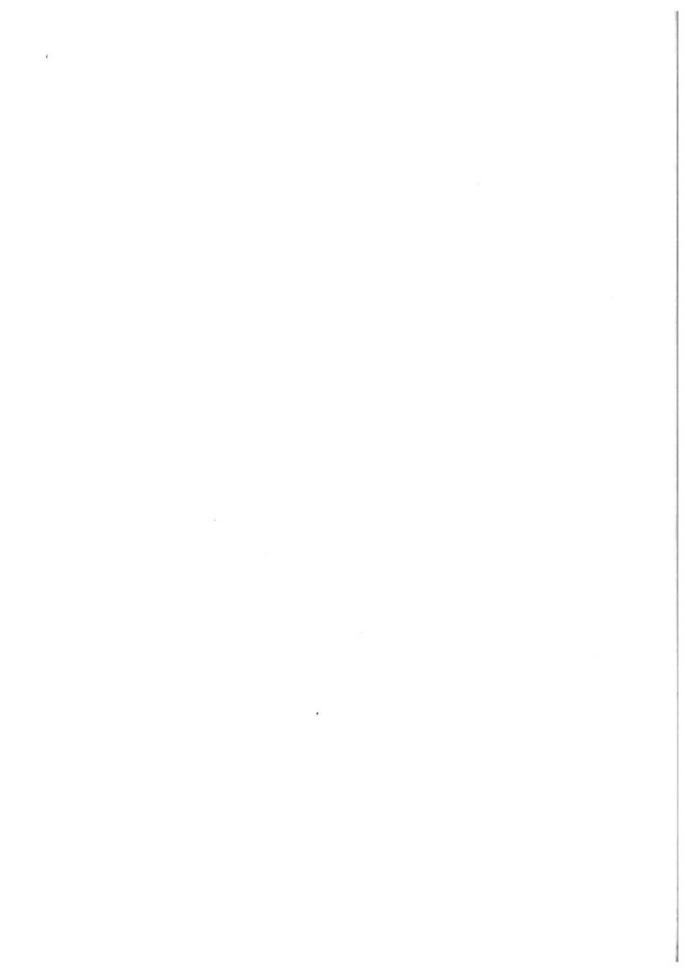
埼玉県戸田市遺跡調査会報告書 第7集

上戸田本村遺跡Ⅲ

1998

戸田市遺跡調査会





埼玉県戸田市遺跡調査会報告書 第7集

かみ と だ ほん むら

上戸田本村遺跡Ⅲ

1998

戸田市遺跡調査会

はじめに

戸田市遺跡調査会

会長 奥 墨 修 一

この上戸田本村遺跡は、弥生時代後期からはじまる集落の跡で、荒川（旧入間川）の氾濫によって形成された自然堤防上にある遺跡です。この地域には、古くから「くまん塚」と呼ばれている古墳跡があり、その存在が知られています。

はじめて発掘調査が行われたのは昭和53年で、市史編さん事業の一環として行われています。その後、平成5年には第2次調査が行われ、古代の住居跡や中世の堀跡を検出するなど多くの成果を上げています。

近年、戸田市は埼京線の開通に伴い交通の利便性から共同住宅や事務所などの建設が進み、街の様子も変わって来ています。このような中で、文化財とりわけ埋蔵文化財の保護は急務となっています。埋蔵文化財は、郷土の歴史を物語る資料として市民の貴重な財産です。

本来、現状のまま保存することが望ましいのですが、住宅建設等に伴う土木工事で止むを得ず現状を変更する場合、緊急の発掘調査を実施し、その記録保存を図っています。本書は、正にその貴重な発掘調査の記録です。

そして、埋蔵文化財の保護と普及活用の資料として、また郷土の歴史研究の基礎資料としてご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、本事業に対し多大な御理解を賜りましたヨートー開発株式会社の皆様、そして直接の発掘調査に貢献されました参加者の皆様方に改めて深く感謝を申し上げます。

例 言

- 1 本書は、埼玉県戸田市本町3丁目1831番地（6番8号）他の共同住宅建設工事に伴って発掘調査された上戸田本村遺跡第3次調査の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査事業及び整理事業は、共同住宅建設の事業者であるヨートー開発株式会社（東京都中央区日本橋蛸殻町1-30-11）から、戸田市遺跡調査会が委託を受けて実施したものである。
- 3 発掘調査は、平成7年3月1日から4月21日にわたって行った。
- 4 発掘調査は別表に掲げた調査組織により実施した。
発掘担当者 小島 清一（戸田市教育委員会 生涯学習課）
- 5 出土品の整理及び図版の作成は、発掘担当者の指導により、整理参加者全員で行った。
- 6 本書の作成にあたり、執筆、写真撮影、編集は小島が行い、渡辺豊子、尾形美枝子、岡崎久子の協力を得た。遺構図版及び基本土層図は渡辺、尾形が作成した。
- 7 発掘調査から報告書を作成するまでの過程で、下記の方々から御教示、御協力を賜った記して謝意を表します。（敬称略）

浅野 晴樹 石坂 俊郎 阿部 深雪 尾形 則敏 小野 義信
鈴木 一郎 中島 宏 根本 靖 野沢 均 野中 仁
戸田市立戸田東中学校 戸田市立郷土博物館 戸田市遺跡調査協力会

- 8 発掘調査及び整理参加者は、下記のとおりである。

浅井 まり子 飯田 美雪 五十嵐 紀志子 五十嵐 智啓 上原 勇
大井 公代 大西 美恵子 岡崎 久子 尾形 美枝子 嘉規 小夜子
桑原 裕子 駒崎 文江 五味 藤子 早乙女 孝子 信濃 節子
荘 由香 鈴木 由紀子 関 徳太郎 高橋 富美子 根本 真
平吹 久美子 広瀬 幸子 本田 五月 三浦 ゆり子 渡辺 豊子

目 次

はじめに

戸田市遺跡調査会会長

奥 墨 修 一

例 言

凡 例

1	発掘調査に至るまでの経過	1
2	発掘調査の経過	2
3	上戸田本村遺跡の立地と環境	3
4	上戸田本村遺跡の概観	5
5	遺構と出土遺物	8
	(1) 住居跡と出土遺物	8
	(2) 溝と出土遺物	11
	(3) 溝状遺構と出土遺物	23
	(4) 堀と出土遺物	39
	(5) その他の遺構と出土遺物	47
	(6) グリッド出土の遺物	49
6	まとめ	50

挿 図 目 次

第1図	上戸田本村遺跡Ⅲ及び周辺の遺跡位置図	3
第2図	大正期の 上戸田本村遺跡周辺の地形図	4
第3図	上戸田本村遺跡調査地位置図	5
第4図	基本土層図	6
第5図	上戸田本村遺跡Ⅲ遺構配置図	7
第6図	第1号住居跡実測図及び遺物出土位置図	8
第7図	第1号住居跡出土遺物実測図	9
第8図	第2号住居跡実測図	10
第9図	第1号溝実測図及び遺物出土位置図	11
第10図	第1号溝出土遺物実測図 (1)	12
第11図	第1号溝出土遺物実測図 (2)	13
第12図	第2号溝実測図	17
第13図	第2号溝出土遺物実測図	19
第14図	第3・4・5・6号溝実測図	21
第15図	溝状遺構実測図	23
第16図	溝状遺構遺物出土位置図 (1) 【壺・甕】	26
第17図	溝状遺構遺物出土位置図 (2) 【埴・埴】	27
第18図	溝状遺構遺物出土位置図 (3) 【高坏】	27
第19図	溝状遺構出土遺物実測図 (1)	28
第20図	溝状遺構出土遺物実測図 (2)	29
第21図	溝状遺構出土遺物実測図 (3)	30
第22図	溝状遺構出土遺物実測図 (4)	31
第23図	溝状遺構出土遺物実測図 (5)	32
第24図	第1号堀実測図	39
第25図	第2号堀実測図	39
第26図	第3号堀実測図	40
第27図	第1・2・3号堀出土遺物実測図	42
第28図	第4号堀出土遺物実測図	43
第29図	第4号堀実測図	45
第30図	井戸跡・土壇・ピット実測図	48
第31図	土壇出土遺物実測図	49
第32図	グリッド出土遺物実測図	49

表 目 次

第1表	第1号住居跡出土遺物	9
第2表	第1号溝出土遺物 (1)	14
第3表	第1号溝出土遺物 (2)	15
第4表	第2号溝出土遺物	19
第5表	溝状遺構出土遺物 (1)	33
第6表	溝状遺構出土遺物 (2)	34
第7表	溝状遺構出土遺物 (3)	35
第8表	溝状遺構出土遺物 (4)	36
第9表	溝状遺構出土遺物 (5)	37
第10表	溝状遺構出土遺物 (6)	38
第11表	第1・2・3号堀出土遺物 (1)	42
第12表	第1・2・3号堀出土遺物 (2)	43
第13表	第4号堀出土遺物	44
第14表	第4号堀出土鉄製品	44
第15表	ピット一覧表	47
第16表	土壌出土の遺物	49
第17表	グリッド出土の遺物	49

図 版 目 次

- | | |
|---|---|
| <p>図版 1 (1) 上戸田本村道跡Ⅲの位置
(2) 調査区域全景</p> | <p>(5) 溝状遺構出土遺物 (第19図-6)
(6) 溝状遺構出土遺物 (第20図-7)</p> |
| <p>図版 2 (1) 第1号住居跡(西から)
(2) 第1号住居跡焼土検出部分(南から)</p> | <p>図版10 (1) 溝状遺構出土遺物 (第20図-8)
(2) 溝状遺構出土遺物 (第20図-9)</p> |
| <p>図版 3 (1) 第1号溝(南上から)
(2) 第1号溝(東から)
(3) 遺構断面(SPA-A'、中は第2号溝)
(4) 土器出土状況(南側部分)
(5) 土器出土状況(第10図-1他)</p> | <p>(3) 溝状遺構出土遺物 (第20図-10)
(4) 溝状遺構出土遺物 (第20図-11)
(5) 溝状遺構出土遺物 (第20図-14)
(6) 溝状遺構出土遺物 (第20図-15)</p> |
| <p>図版 4 (1) 第2号溝(北から)
(2) 第6号溝(南上から)</p> | <p>図版11 (1) 溝状遺構出土遺物 (第21図-17)
(2) 溝状遺構出土遺物 (第21図-20)
(3) 溝状遺構出土遺物 (第21図-21)
(4) 溝状遺構出土遺物 (第21図-22)</p> |
| <p>図版 5 (1) 溝状遺構(西から)
(2) 土器出土状況(上から)
(3) 土器出土状況(南から)
(4) 土器出土状況(上から)
(5) 土器出土状況(上から)</p> | <p>(5) 溝状遺構出土遺物 (第21図-23)
(6) 溝状遺構出土遺物 (第21図-24)</p> |
| <p>図版 6 (1) 第1号堀
(北から、中ほどは土層図用ベルト)
(2) 第2号堀(東から)
(3) 第3号堀(西から)</p> | <p>図版12 (1) 溝状遺構出土遺物 (第22図-25)
(2) 溝状遺構出土遺物 (第22図-27)
(3) 溝状遺構出土遺物 (第22図-28)
(4) 溝状遺構出土遺物 (第22図-29)
(5) 溝状遺構出土遺物 (第22図-31)
(6) 溝状遺構出土遺物 (第22図-33)</p> |
| <p>図版 7 (1) 第4号堀(北から)
(2) 鉄製品出土状況
(3) 井戸跡(東から)</p> | <p>図版13 (1) 溝状遺構出土遺物 (第22図-34)
(2) 溝状遺構出土遺物 (第22図-36)
(3) 溝状遺構出土遺物 (第22図-38)
(4) 溝状遺構出土遺物 (第23図-39)
(5) 溝状遺構出土遺物 (第23図-40)
(6) 溝状遺構出土遺物 (第23図-41)</p> |
| <p>図版 8 (1) 第1号住居跡出土遺物(第7図-2)
(2) 第1号溝出土遺物(第10図-1)
(3) 第1号溝出土遺物(第10図-2~5)
(4) 第1号溝出土遺物(第11図-11)
(5) 第1号溝出土遺物(第11図-13)
(6) 第1号溝出土遺物(第11図-16)</p> | <p>図版14 (1) 第1号堀出土遺物(第27図-1~4)
(2) 第2号堀出土遺物(第27図-5~9)</p> |
| <p>図版 9 (1) 溝状遺構出土遺物(第19図-1)
(2) 溝状遺構出土遺物(第19図-2)
(3) 溝状遺構出土遺物(第19図-4)
(4) 溝状遺構出土遺物(第19図-5)</p> | <p>図版15 (1) 第3号堀出土遺物(第27図-10・11)
(2) 第4号堀出土遺物(第28図-1~3)</p> |
| | <p>図版16 (1) 第4号堀出土鉄製品(第28図-4)
(2) 土壌・グリッド出土遺物
(第31図-1、第32図-1)</p> |

発掘調査の組織

会 長	戸 田 市 教 育 委 員 会 教 育 長	奥 墨 修 一
理 事	戸 田 市 教 育 委 員 会 教 育 次 長	石 山 勝 成
(会長代理)		
理 事	戸 田 市 文 化 財 保 護 委 員	金 子 弘
"	"	萩 原 勝 明
"	戸 田 市 開 発 部 都 市 計 画 課 課 長	中 村 信 之
"	戸 田 市 開 発 部 ま ち づ け 推 進 課 課 長	家 崎 匡 匡
"	戸 田 市 建 設 部 建 築 課 課 長	熊 谷 清 志
"	戸 田 市 教 育 委 員 会 生 涯 学 習 課 課 長	伊 藤 和 彦
監 事	戸 田 市 社 会 教 育 委 員 会 委 員 長	池 上 皖 造
"	戸 田 市 郷 土 博 物 館 館 長	西 田 賢 吉
事 務 局 長	戸 田 市 教 育 委 員 会 生 涯 学 習 課 課 長	伊 藤 和 彦
"	" 専 門 員	柳 田 哲 之 丞
調 査 員	" 学 芸 員	小 島 清 一

凡 例

- 本書に掲載した挿図の縮尺は、原則として遺構図版1/80・1/40、遺物実測図1/4である。それ以外は、図に添えたスケールを参照されたい。
- 遺構・遺物図中の焼土、炭化物等の標示は次のとおりである。



- 土器観察表における胎土の記号は、下記のとおりである。
A：石英 B：金雲母 C：斜長石 D：黒く光る石 E：赤色粒子
F：白色粒子 G：褐色粒子 H：砂粒子
- 土層中の水系レベルは、すべて標高2.8mである。

1 発掘調査に至るまでの経過

平成6年11月11日、東京都中央区日本橋蛸殻町1丁目30番11号のヨートー開発株式会社代表取締役山岸新氏（以下「事業者」という。）から、戸田市本町3丁目1830番地（6番8号）他に共同住宅建設の開発行為に伴う事前相談がなされた。

戸田市では、昭和60年の埼京線の開通により、共同住宅をはじめ事務所建設等の開発が進み、文化財の保護が急務となっている。このような状況において、戸田市教育委員会では開発担当所管課と各種の協議を重ね、文化財保護と開発事業との調整を図っている。

上戸田本村遺跡は、古くから「くまん塚」と称する古墳跡が所在することが知られており、また昭和53年に市史編纂事業の一つとしての発掘調査や平成5年に共同住宅建設に伴っての第2次調査が行われて以来、弥生時代後期から古墳時代の集落跡や古墳跡、中世の堀跡などが所在することが明らかになっている。

このようなことから、教育委員会では当該地が上戸田本村遺跡の包蔵地に位置するため、開発を行う際には遺跡の現状を確認するため、試掘調査を実施する旨の回答をした。

その後、協議を重ね平成6年11月21・22日の2日間にわたり試掘調査を実施した。結果、開発予定地の一部に弥生時代後期の溝跡や古墳時代の住居跡、堀跡等を確認した。教育委員会では調査結果をふまえ、その取り扱いについて事業者と協議を行った。現地における遺跡の保存については計画を変更することが困難であることから、事前に記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

これをもって、事業者からは平成7年2月27日付で、文化財保護法第57条の2第1項の規定による埋蔵文化財発掘届が文化庁長官あてに提出された。発掘調査に際し、教育委員会と事業者で協議し、事業が緊急を要することを考慮し、戸田市遺跡調査会会長と事業者は平成7年2月27日に事業委託契約を締結した。発掘調査は、平成7年3月1日から開始することとなった。

戸田市遺跡調査会からは、文化財保護法第57条第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査届が文化庁長官あてに提出された。

なお、文化庁長官からは、平成7年3月6日付、教文第3の627号をもって発掘届を受理した旨通知があった。

2 発掘調査の経過 - 日誌抄 -

上戸田本村遺跡第3次調査は、平成7年3月1日から4月21日までの約1カ月半の間で実施した。作業開始の頃においては、冬の寒さも和らぎ調査を行いやすい季節であったが、雨が続く日もあって幾度か水没を免れず、また調査地の西側は低地域となるため水対策が欠かせない調査であった。

以下、調査経過が6期に区分できるので整理しながら経過を見ていきたい。

(3月1日～3月3日)

発掘調査の実施にあたって、現地において調査範囲の設定や残土の処理など細部にわたる打ち合わせをおこなった。また、調査に必要な資材等の調達や点検を行い、現地に搬入した。

(3月6日～3月10日)

3月6日の早朝より関係者が集まり、調査が速やかに進むよう調査方法を再確認、重機により表土の掘削作業を開始した。掘削にあたっては、試掘調査の結果をもとに遺構確認面である黄褐色土層まで行った。初日から試掘調査において検出されていた多量の土器が確認され、関係者全員が緊張し見守るなか慎重に掘削を進めた。重機による作業は3月7日に終わり2日間を要した。3月8日から3月10日までの3日間は人力により表土の掘削を行った。全部で5日間を要した。なお、基準点測量及びグリッドの設定を3月10日に行った。

(3月13日～3月15日)

表土が除去され、3月13日から遺構確認作業に移る。南側から北に向かって遺構確認面である黄褐色粘土層の精査を丹念に行った。とくに多量の土器検出部分(溝状遺構)については、住居跡との切り合いがあることから、慎重に新旧の関係を確認しながら行った。この段階で明らかになった主な遺構は住居跡2軒、溝6本、掘跡などで中央部分においては複雑な様子を表していた。

(3月16日～4月17日)

3月16日から確認された各遺構の調査を開始する。第1号住居跡から取りかかり、並行して堀の調査を進めた。遺物の取り上げについては、分布図を作成し記録した。とくに、溝状遺構については、土器が予想を上回って多量に出土しており、参加者の息を上がらせるものであった。

(4月18日～4月20日)

調査区域内における遺構の全容を写真に記録するため、18日から全員で清掃作業を行い、19日に上空から全体の写真撮影を行った。

(4月20日～4月21日)

4月20日の午後から検出された遺構の全体測量を行う。21日、予定された現地においての全作業を完了し、午後約1カ月半を過ごしたプレハブ内の資材を撤収した。

調査日数42日、参加延べ人数406名であった。

3 上戸田本村遺跡の立地と環境



1. 前谷遺跡 2. 鍛冶谷・新田口遺跡 3. 上戸田本村遺跡 4. 南町遺跡
 5. 南原遺跡 ● 上戸田本村遺跡Ⅲ

第1図 上戸田本村遺跡Ⅲ及び周辺の遺跡位置図

上戸田本村遺跡Ⅲ（第3次調査）の調査地は、戸田市本町3丁目1830番地（6番8号）他に位置している。JR埼京線の「戸田公園駅」より約500mのところである。交通の利便性から共同住宅等の開発が盛んな地域となっている。

戸田市は埼玉県の南端に位置し、東は川口市、北は浦和・蕨両市、西から南は荒川を境とし朝霞・和光両市、そして東京都板橋区・北区と接している。面積は、18.17㎢を測る。東には中山道が、西には国道17号バイパスが、中央には東北・上越新幹線及び埼京線が縦断し東京へと通じている。かつて、荒川には「戸田の渡し」や「早瀬の渡し」があって、江戸への玄関口として交通の要衝となっていたところである。現在、荒川は西部では北西から南東へ流れ、笹目付近で東へと方向を変え南部ではほぼ東西に流路をとっている。

こうした周辺地域の状況の下で、埼玉県選定重要遺跡である鍛冶谷・新田口遺跡をはじめとする市内の遺跡群が分布する低平な微高地は、荒川（旧入間川）の溢流によって形成された火山灰質の黄褐色粘土層を基盤としている。標高は4～5mを測る。

戸田市内における主な遺跡は、中央部に位置しており、第1図のように前谷遺跡、鍛冶谷・新田口遺跡、南原遺跡等が連なり、上戸田川に添うように遺跡群を形成している。いずれも弥生時代後期から古墳時代の住居跡や方形周溝墓、また中世の堀跡などを検出する集落跡である。

上戸田本村遺跡はNo.3で、鍛冶谷・新田口遺跡の南側で自然堤防の中ほどに位置するものである。

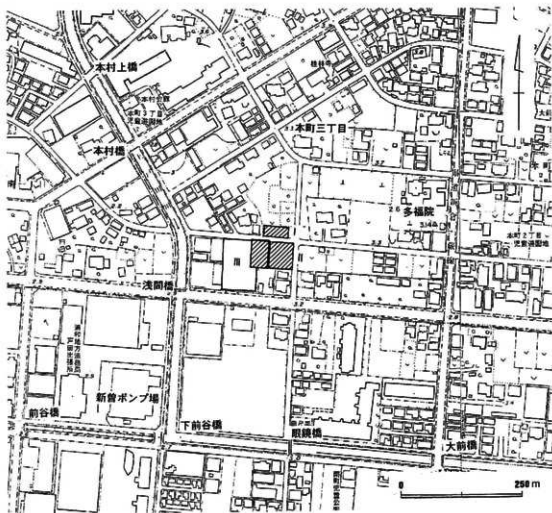


第2図 大正期の上戸田本村遺跡周辺の地形図

4 上戸田本村遺跡の概観

上戸田本村遺跡は、荒川（旧入間川）の溢流によって形成された自然堤防の中ほどで鍛冶谷・新田口遺跡と同じ微高地上に立地している。古くから「くまん塚」と称する古墳跡の所在や昭和53年と平成5年の2度にわたる調査によって、弥生時代後期から古墳時代の集落跡や中世期における堀跡の存在が明らかになっている。

遺跡の位置するところは現在の戸田市本町にあたるが、もとは上戸田村に属している。江戸時代の末期に編纂された『新編武蔵風土記稿』の上戸田村の項を見ると、「上戸田村ハ郡境荒川ノ岸ニアリ、江戸ヨリノ行程三里、戸田領十一カ村ノ本郷ナリ、古上下戸田及ヒ蘇、塚越ノ四村ヲ合セ戸田村ト唱ヘシト云、サレド正保ノ改ニ載タレバ分村セシハ近世ノ事ニアラス・・・」と記されている（注1）。戸田領とは上戸田村、下戸田村、新曽村、横曽根村、上青木村、下青木村、里村、西新井宿村、前川



第3図 上戸田本村遺跡調査地位置図

村、蕨宿、塚越村の十一カ村から成っており、現在の戸田市、蕨市、川口市、鳩ヶ谷市、東京都北区にわたる範囲とされている。そして、同書の小名に項には上戸田村として「鍛冶屋 新田 本村 前新田 後谷 東村」の地名が載せられている。また、第2図の大正期の地形図にもあるが、当調査地は上戸田村の本村に位置している（注2）。

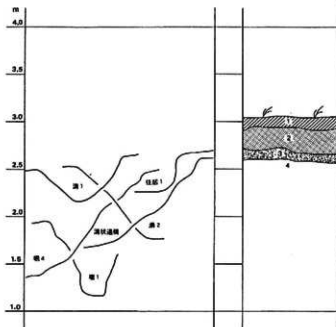
古代における上戸田本村遺跡は、「くまん塚」と称する古墳跡や土師器の散布地として知られており、約30,000㎡が遺跡の範囲と推定されている。「くまん塚」からは、横穴式石室の石材の一部と直刀が二振り残されている。二振りとも平造りの直刀で、茎部を欠失しているため刀身長は計測できない状態であるが、現存では二振りとも約60cm前後のものである。

発掘調査における今までの成果としては、この報告を含め3次にわたる調査が実施されており弥生時代をはじめ、古墳時代や中世の遺構や遺物を多数検出している。

古代においては、第1次調査の主な遺構として住居跡が4軒、方形周溝墓が2基検出されている。住居跡は完全な形で検出されたものはないが、古墳時代前期ものが2軒、古墳時代後期の住居跡が2軒である。方形周溝墓は2基とも古墳時代前期のものであると報告されている（注3）。

次に第2次調査であるが、弥生時代後期の溝1本と古墳時代前期の住居跡13軒が検出されている。そして、今回の第3次調査では弥生時代後期の溝が1本（第2次調査の続き）、古墳時代後期の住居跡が2軒、土器を多量に出土した溝状遺構が検出されている（注4）。

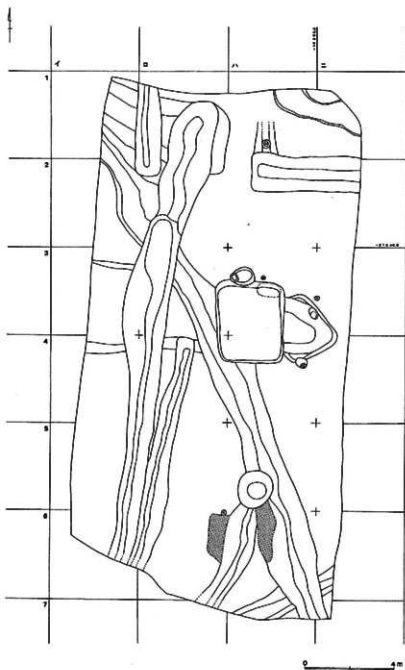
中世においては、第1次調査地から遺構は検出されていないが、第2・3次調査地からは陶器片などを出土する堀跡を検出している。調査の規模が小さく、全体像をつかむ資料とまではならないが、館跡などの存在と関連づける成果を得ている。また、南側に近接する南町遺跡の土城からは、宝篋印塔の相輪や板石塔婆の一部が出土しており、墳墓あるいは寺院跡の存在を漂わしている（注5）。



土層註

1. 盛土
ロームブロック、小石、砂等を多量に含む盛土。粘性、弱。しまり、弱（ぼろぼろ）。
2. 暗褐色土
黄褐色土粒子を一律に多量、赤褐色粒子を微量、黒色土粒子を少量、炭化物を微量含む。粘性、弱。しまり、良。
3. 黒褐色土
黄褐色土粒子を多量、黄褐色土ブロック（φ30～50mm）を多量、赤褐色粒子をごく微量、炭化物を微量含む。粘性、良。しまり、良。
4. 黄褐色土
粘土質土層。基礎の層。粘性、強。しまり、強。

第4図 基本土層図



第5図 上戸田本村遺跡Ⅲ遺構配置図

注1 『新編武蔵風土記稿』巻之一百四十一 足立郡之七 戸田領

注2 調査地については、現在の地図と照合して推定したもの

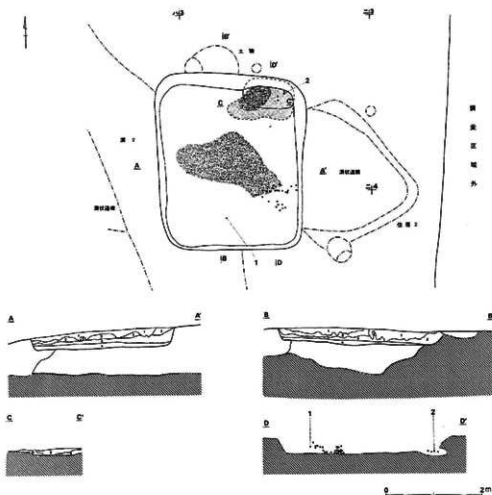
注3 『戸田市史 資料編Ⅰ』戸田市1981

注4 小島清一『上戸田本村遺跡Ⅱ』戸田市遺跡調査会報告書第6集 戸田市遺跡調査会 1997

注5 塩野博『南町遺跡Ⅰ』戸田市遺跡調査会報告書第1集 戸田市遺跡調査会 1987

5 遺構と出土遺物

(1) 住居跡と出土遺物



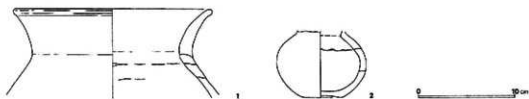
土層註

1. 灰褐色土 赤褐色粒子、灰褐色土粒子を微量含む。粘性、弱。しまり、良。
(上層からの耕作土)
2. 黒褐色土 黄褐色土粒子を微量、赤褐色粒子をごく微量、白色微粒子を一様に少量含む。
粘性、良。しまり、良。
3. 黒褐色土 黄褐色土粒子を微量、赤褐色粒子をごく微量、白色微粒子を一様に少量(2層よりも少ない)含む。色調が2層よりも微妙に明るい。粘性、良。しまり、良。
4. 黒褐色土 黄褐色土粒子を微量、赤褐色粒子をごく微量、灰褐色土粒子をブロック状に含む。第1号住居跡の床面。粘性、良。しまり、強。
5. 暗褐色土 黄褐色土粒子を多量、黄褐色土ブロック(φ10~30mm)を少量、赤褐色粒子を微量、鉄斑あり。粘性、良。しまり、良。
6. 暗褐色土 黄褐色土粒子を多量、炭化物・焼土を多量、粘性、良。しまり、良。

第6図 第1号住居跡実測図及び遺物出土位置図

第1号住居跡（第6図）

調査区の中央ロハ-3~4グリッドに位置する。西側へ約5m移ると傾斜地となつてしまい、微高地の西側縁辺にあたる部分に構築されているようである。調査区内においては、この部分は複雑になっているところで、第2号住居跡や第2号溝、溝状遺構、土壌と切り合つて構築されている。本跡との新旧関係は、土壌よりも古くなるが、切り合う他のどの遺構より本跡の方が新しい。規模は、長径3.7m、短径3.0m、面積は約11.1㎡を測り、整った隅丸方形プランを呈する。軸偏差は、南北軸がN-90°-Wをとる。床面は、遺構確認面から見ると45.0cmほどの深さで、ほぼ平坦な掘り込みである。炉跡やピットなど住居内の施設については、溝状遺構との切り合い関係もあって床面が不明瞭で、検出はできなかった。覆土については炭火物を検出した。床面の直上の位置から全面に広がりを見せていた。また、北東コーナーにおいて、床面に固くしまった部分を検出した。範囲は長径110cm、短径60cmで、深さは床面とほぼ同じであった。掘り方については、北側壁をオーバーハングするように掘り込まれていた。その床には、約10cmほどの厚さで焼土が覆っていた。図示することができた遺物は甕形土器（No.1）と埴形土器（No.2）である。遺物は少なく、図示できなかった小破片を含めても総数は32点である。特に埴形土器は、焼土と同じ地点から検出している。



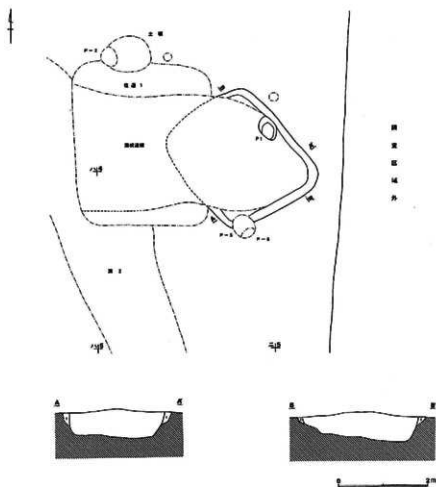
第7図 第1号住居跡出土遺物実測図

第1表 第1号住居跡出土遺物（第7図）

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕	口径 (21.0)	口縁部破片。頸部で屈曲し大きく開く。厚みのあるしっかりとしたつくりである。外面の口縁部をヨコナデ、胴部をナデ調整。内面は細かい刷毛整形後、丁寧なナデ調整。胴部に輪轆み痕を残す。残存、口縁部のみ20%。	胎土 E少 FH多 焼成 良好 色調 濃茶褐色	
2	埴	頸部径 5.0 胴径 9.3 底径 4.0	偏平に膨らむ胴部。頸部は小さく収縮。底部は僅かな上げ底状を呈する。不明瞭であるが、外面にナデ調整がある。残存、40%。口縁部を欠損。	胎土 D微 E少 焼成 良好 色調 淡橙褐色	

第2号住居跡 (第8図)

調査区の中央ハ〜ニ-2〜4グリッドに位置する。第1号住居跡や溝状遺構と切り合い構築されている。出土した遺物が無く時期の比較はむずかしいが、遺構の覆土の断面から新旧関係を推察すると、切り合う二者より本跡の方が古い状況を示している。規模は、長径2.8m、短径2.5m、面積を約7.0㎡を測り、隅が僅かに丸くなる不整形方形プランを呈する。軸偏差は、南北軸がN-40°-Wをとる。床面は、遺構確認面から22.0cmほどの深さとなるようである。住居跡内からはピットが1箇所北側の壁際から検出されている。P1は直径約60cm、床面からの深さ40cmを測り、不整形円形である。遺物の検出はなかった。なお、この住居跡の外形は住居としての形を呈しているが、切り合う溝状遺構によって壊されている。第8図のとおりであるが、住居跡の覆土は壁あるいはコーナー付近に辛うじて残っているような状況であった。

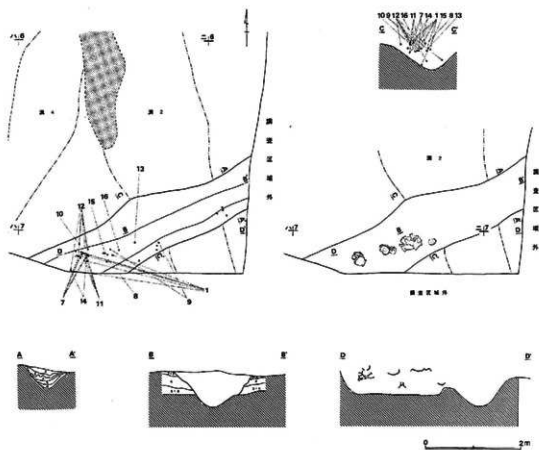


土層註

1. 明褐色土 黄褐色土粒子をブロック状に多量含む。鉄斑あり。粘性、良。しまり、良。

第8図 第2号住居跡実測図

(2) 溝と出土遺物



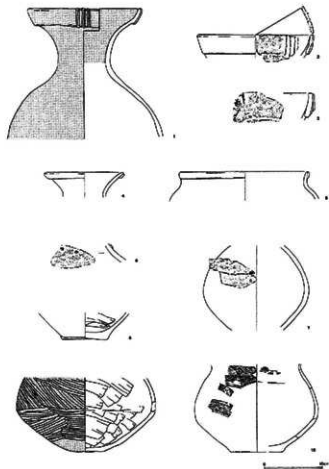
土 層 註 (土層番号は第2次調査の土層註と対照)

2. 暗褐色土 黄褐色土粒子を少量、灰褐色土粒子を微量、炭化物を微量含む。
粘性、良。しまり、良。
3. 暗褐色土 黄褐色土粒子を多量、黄褐色土ブロック(φ30~50mm)を多量、灰褐色土ブロック(φ10~30mm)を多量含む。鉄斑あり。粘性、良。しまり、良。
4. 黒褐色土 黄褐色土粒子を少量、灰褐色土粒子を少量、赤褐色粒子をごく微量含む。
粘性、良。しまり、良。
5. 明灰褐色土 黄褐色土粒子を多量、灰褐色土粒子を多量含む。
粘性、良。しまり、良。
6. 暗灰褐色土 黄褐色土粒子を多量、黄褐色土ブロック(φ10~30mm)多量、赤褐色粒子をごく微量、灰褐色土ブロック(φ10~30mm)を多量、黒褐色土を多量含む。
粘性、強。しまり、良。(第2次調の第7層も含まれる。)

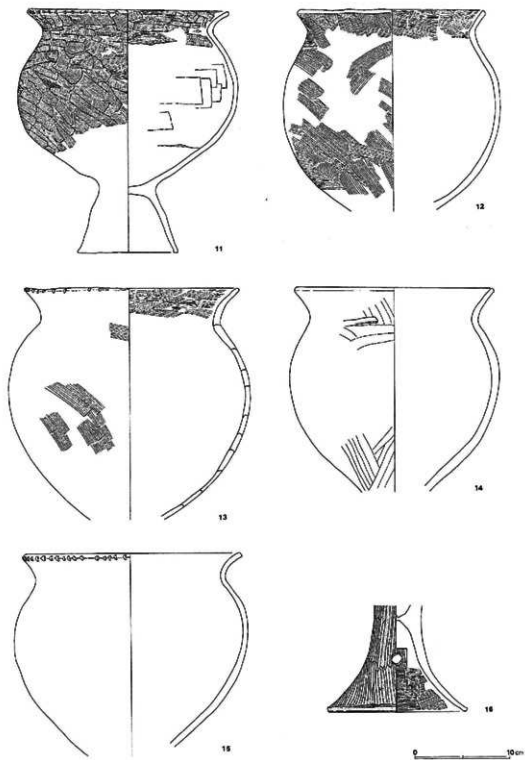
第9図 第1号溝実測図及び遺物出土位置図

第1号溝 (第9図)

調査区の南東隅ハ〜ニ-6〜7グリッドに位置する。調査区のコーナー部分に辛うじて見えてきたもので、斜方向に検出されている。北側方向については、第2次調査において検出されており断面がやや丸みを帯びた「V」字形の掘り込みで多数の土器などの遺物を伴って検出されている。検出部分の中ほどを第2号溝が直交するように切り合って構築されている。新旧関係は、第2号溝よりも本跡の方が古い。形態は直線的で、断面はV字形になっているが第2次調査区域で検出した部分よりも丸みを帯びている。検出された部分の長さは約4.2m、上面の幅は0.9〜1.1m、底面の幅は0.3m〜0.4m、深さは52〜60cmを測る。北側に向けて僅かに広がるようである。軸偏差は、南北軸がS-65°-Wをとる。この遺構に関連した付属遺構は特に見られなかった。遺物は、第2次調査区域からの続きということもあって、一括投棄されたようにまとまった状態で多量に出土している。検出された遺物については、一括して取り上げたものが多く総数にして30点を数えるものであった。主な遺物は、壺形土器 (No.1〜10) や台付壺形土器 (No.15)、高環形土器 (No.16) などである。



第10図 第1号溝出土遺物実測図 (1)



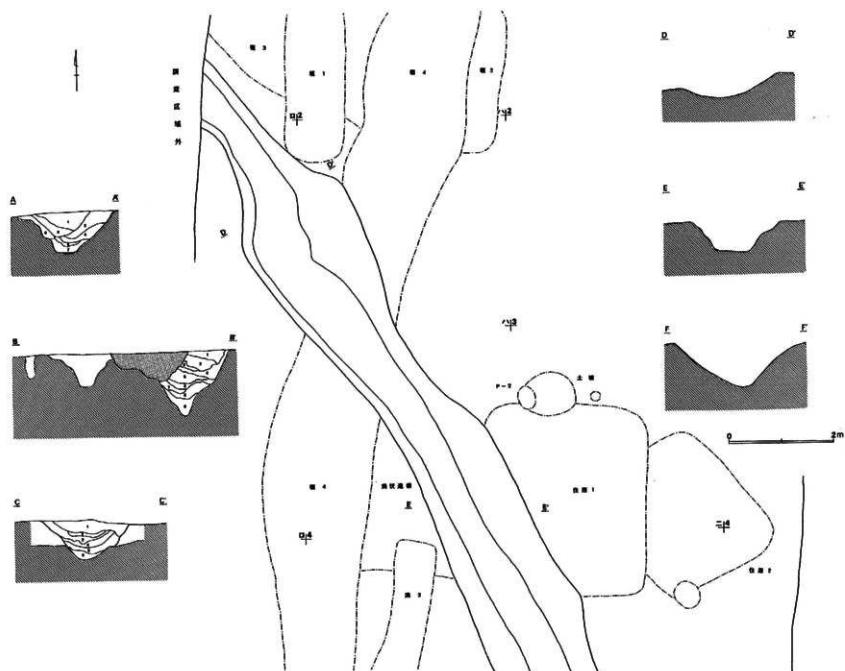
第11图 第1号沟出土文物实测图 (2)

第2表 第1号溝出土遺物 (1) (第10・11図)

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	壺	口径 19.5 胴部 (28.6)	複合口縁を呈する。複合部に3本を単位とする棒状浮文を付し、口縁部を4分割する。胴部は球形を呈し、頸部は細く収縮する。外面は細かい斜方向の、内面は横方向のヘラミガキ調整を施す。外面及び内面の口縁部を赤彩。また、外面の肩部と内面の口縁部に黒斑あり。残存、上半部のみ40%	胎土 H少 EFG多 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
2	壺	口径 (20.2)	幅の広い複合口縁を呈する。複合部に断面三角形の棒状浮文を付す。複合部及び口唇部に縄文を施文。内面は丁寧なナデ調整。黒斑あり。残存、口縁部5%。	胎土 EH少 FG多 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
3	壺		幅の広い複合口縁を呈する。複合部に棒状浮文を幅3cm間隔で配す。複合部及び口唇部に縄文を施文。内面は丁寧なナデ調整。内面に丁寧なヘラミガキ後の赤彩痕あり。残存、口縁部5%。	胎土 H少 EG多 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
4	壺	口径 14.0	細い頸部から大きく開く口縁部。幅の細い複合口縁で、端部に刻み目を加える。厚感著しく調整等不明瞭。残存、口縁部60%。	胎土 H少 EG多 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	
5	広口壺	口径 22.0	幅の細い複合口縁。外面の複合部と内面の口縁部に縄文を施す。施文部を除き、内外面ともに赤彩。残存、口縁部10%。	胎土 FH少 EG多 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
6	壺		壺の肩部片。外面の文様帯は、羽状縄文に円形浮文を貼り付ける。内面はナデ調整。外面のみ赤彩。残存、胴部のみ5%。	胎土 EH少 FG多 焼成 良好 色調 暗灰褐色	
7	壺	胴径 18.1	壺の胴部。下半に最大径をもつ。不明瞭であるが、外面に丁寧なヘラミガキ調整の後、胴部に2段の縄文を施し、下端と中段をS字状結節文で区画する。また、中段には、2コ1単位として径4mmほどの円形浮文を貼り付ける。外面の文様帯を除き赤彩。残存、胴部のみ40%。	胎土 EH少 FG多 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
8	壺	底径 8.2	小さな底部から大きく開く。外面丁寧なナデ調整。内面ヘラナデ調整。底部のみ残存。	胎土 EG少 FH多 焼成 良好 色調 薄い茶褐色	
9	壺	胴径 23.8 底径 5.8	壺の胴下半部及び底部。下半に最大径をもつ。外面は丁寧なヘラミガキ調整。内面は、斜方向のヘラナデ調整。外面に赤彩痕、また底部の内外面に黒斑あり。残存、胴部60%。	胎土 EH少 FG多 焼成 良好 色調 淡橙褐色	

第3表 第1号溝出土遺物 (2)

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
10	広口壺	頸部径 15.4 胴径 21.4 底径 9.2	小さな底部から大きく張る胴部、最大径を下半にもつ。外面は刷毛整形後、ナデ調整。内面、ナデ調整。底部の内外面に風斑あり。残存、20%。口縁部を欠損。	胎土 E微 DH少 FG多 焼成 やや不良 色調 にぶい橙褐色	
11	台付甕	口径 21.3 胴径 23.2 脚径 10.6 器高 25.7	頸部は緩やかに屈曲し、口縁部は短く外反する。口唇部に平坦面をつくり、端部には刻み目を施す。外面は丁寧な刷毛整形、胴下半部は器表面の剥落が著しい。内面の口縁部は刷毛整形、胴部は木口状工具による整形痕が残る。残存、60%。	胎土 GH少 F多 焼成 不良 色調 にぶい橙褐色	
12	台付甕	口径 20.0 胴径 23.0	「く」の字状に屈曲する頸部。口縁部は短く開き、端部に平坦面をつくる。胴部は球形を呈する。外面は粗い刷毛整形。内面の口縁部は刷毛整形、胴部はナデ調整。残存、60%。脚台部を欠損。	胎土 EF少 GH多 色調 淡赤褐色	
13	台付甕	口径 (24.3) 胴径 (25.4)	「く」の字に屈曲する頸部。口縁部は外反し、端部に刻み目を施す。胴部は球形となるが、上半に最大径をもつ。内外面ともに不明瞭であるが、胴部と内面の口縁部に刷毛目が残る。残存、60%。脚台部を欠損。	胎土 F少 GH多 焼成 不良 色調 にぶい橙褐色	
14	台付甕	口径 (21.0) 胴径 (22.0)	「く」の字状に屈曲する頸部。口縁部は外反する。端部に平坦面をつくる。胴部の張りは弱い。不明瞭であるが、外面はヘラナデ調整、内面はナデ調整。残存40%。脚台部を欠損。	胎土 EH少 FG多 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	
15	台付甕	口径 (23.2) 胴径 (24.6)	緩やかに屈曲する頸部。口唇部には、刻み目を施す。外面は丁寧なナデ調整。下に細かい刷毛整形痕が残る。内面はナデ調整。口縁部に刷毛整形痕が残る。残存70%。脚台部を欠損。	胎土 EH少 F多 焼成 やや不良 色調 淡灰褐色	
16	高 杯	脚径 14.6	細い接合部から裾部にかけて曲線を描いてラッパ状に大きく開く。中位に3ヶ所の孔を穿つ。外面は刷毛整形の後、丁寧なヘラミガキ調整。内面の上半はナデ調整、下半は刷毛整形。外面のみ赤彩。残存、脚部のみ90%。	胎土 DEFH少 G多 焼成 良好 色調 淡橙褐色	



土層註(A)

3. 暗褐色土 黄褐色土粒子を少量、赤褐色粒子をごく微量、炭化物をごく微量含む。粘性、良。しまり、良。
4. 黒褐色土 黄褐色土粒子を少量、赤褐色粒子をごく微量含む。粘性、良。しまり、良。
5. 黒褐色土 黄褐色土粒子を多量、赤褐色粒子を微量、灰褐色土粒子を多量含む。粘性、良。しまり、良。

土層註(B)

1. 明褐色土 黄褐色土粒子を一様に少量、赤褐色粒子をごく少量、灰褐色土粒子を一様に少量含む。粘性、弱。しまり、良。
1. 明褐色土 黄褐色土粒子を少量、黄褐色土ブロック(φ10~30mm)を多量、赤褐色粒子をごく微量、灰褐色土粒子を少量、黒色土を少量含む。粘性、弱。しまり、良。
2. 暗褐色土 黄褐色土粒子を多量、灰褐色土粒子を微量、黒褐色土を多量含む。粘性、良。しまり、良。
3. 暗褐色土 黄褐色土粒子を多量、黄褐色土ブロック(φ30~50mm)を少量、黒色土を多量含む。粘性、良。しまり、良。
4. 黒褐色土 黄褐色土粒子を微量、赤褐色粒子をごく微量、黒褐色土を少量含む。粘性、強。しまり、良。
5. 黒褐色土 黄褐色土粒子を多量、黄褐色土ブロック(φ50mm)を含む。粘性、強。しまり、良。
6. 暗褐色土 黄褐色土粒子を多量、灰褐色土粒子を少量、黒褐色土を多量含む。粘性、強。しまり、良。

第2号溝 (第12図)

調査区の中央イ〜ハー1〜7グリッドに位置する。北西隅から南東隅に向けて直線的に構築され、南から北に向けて傾斜地を緩やかに下るようである。北側・南側の両端は、調査区域外に延びており、一部分を検出したような状況である。北側では第4号堀と切り合い、南へ上り第4号溝、溝状遺構、第1号住居跡、井戸跡、そして第1号溝とそれぞれにおいて切り合っている。新旧関係は、第1号住居跡や第4号堀よりも古く、他の遺構よりも本跡の方が新しい。形態は、ほぼ直線的で、断面はやや丸みを帯びるV字形を呈する。検出された部分の長さは約24.0m、上面の幅は1.2〜2.3m、底面の幅は0.2m〜1.0m、深さは80〜126cmを測る。北側の低地部分に下がるにしたがって幅が広がるようである。軸偏差は、南北軸がN-30°-Wをとる。検出された遺物については、ごく小破片がほとんどであった。主な遺物は、小型の壺形土器底部 (No.1) などである。



第13図 第2号溝出土遺物実測図

第4表 第2号溝出土遺物 (第13図)

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	小型壺	底径 (6.3)	上げ底状を呈する底部。調整等不明瞭であるが外面にはヘラミガキが、内面にはヘラナデの痕跡あり。外面のみ赤彩。底部のみ充存。	胎土 E多 焼成 良好 色調 淡橙褐色	

土層註 (C)

1. 明褐色土 黄褐色土粒子を多量、黄褐色土ブロック (φ10〜50mm) を多量、灰褐色粒子微量含む。炭化物を微量含む。鉄斑あり。粘性、良。しまり、良。
2. 暗褐色土 黄褐色土粒子を微量、灰褐色土粒子をごく微量含む。粘性、良。しまり、良。
3. 暗褐色土 黄褐色土粒子を多量、灰褐色土粒子をごく微量含む。粘性、良。しまり、良。
4. 黒褐色土 黄褐色土粒子を微量、赤褐色粒子をごく微量含む。粘性、強。しまり、良。
5. 黒褐色土 黄褐色土粒子を少量含む。粘性、強。しまり、良。
6. 暗褐色土 黄褐色土粒子を多量、黄褐色土ブロック (φ5〜20mm) を少量含む。鉄斑あり。粘性、強。しまり、強。

第3号溝 (第14図)

調査区の西側ロー4～6グリッドに位置する。中央から南に向けて直線的に構築されている。南側は、調査区域外に延びており、一部分を検出したような状況である。南に進むにつれて第4号堀と合流するようなかたちで切り合っている。新旧関係は、本跡の方が古い。形態は、ほぼ直線的で、断面はやや丸みを帯びるV字形を呈する。検出された部分の長さは約10.7m、上面の幅は0.8～1.2m、底面の幅は0.2m～0.3m、深さは36～77cmを測る。南側の方に向かって僅かに傾斜をもって下るようである。軸偏差は、南北軸がN-15°-Eをとる。覆土中より古墳時代前期の小さな土器破片が出土しているが、明確な時期設定の基準となるような遺物は検出できなかった。

第4号溝 (第14図)

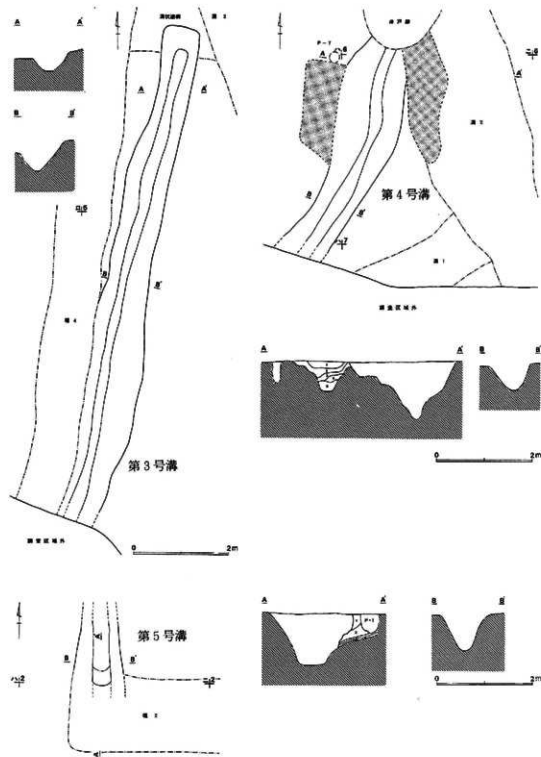
調査区の南側ロー5～6グリッドに位置する。南に向けて直線的に構築されている。先は、調査区域外に延びている。始点において第2号溝や井戸跡と切り合っている。新旧関係は、本跡が最も古い。形態はほぼ直線的で、断面はやや丸みを帯びるU字形を呈する。検出された部分の長さは約4.8m、上面の幅は0.9～1.3m、底面の幅は0.2m～0.3m、深さは49～63cmを測る。南側に向けて僅かに広がるようであり、底面の傾斜は約14cm程である。軸偏差は、南北軸がN-20°-Eをとる。遺物は、古墳時代前期の土器破片は出土しているが、図示し得るような遺物は無かった。

第5号溝 (第14図)

調査区の西側ロー1グリッドに位置する。北側の第2号堀に接して僅かに検出されている。南北方向に構築されている。形態上は、遺構確認面から両端が消えてしまい不明確になってしまっているが、調査域外に延びているようである。第2号堀との新旧関係は、本跡の方が古くなる。形態は、僅かであるがほぼ直線的である。断面は浅いU字形を呈する。検出された部分の規模は、長さ約1.4m、上面の幅は0.8～1.4m、底面の幅は0.3m～0.4m、深さは31～71cmを測る。軸偏差は、南北軸がN-0°-Wをとる。古墳時代前期の土器破片を検出したが、小破片がほとんどで図示し得るような遺物は無かった。

第6号溝 (第14図)

調査区の北側ロー2～1グリッドに位置する。北側から北東隅に向けて直線的に構築されている。北側・東側の両端は、調査区域外に延びており、屈曲したコーナー部分を検出したような状況である。調査区の隅に構築されており、切り合う遺構は全くなかった。形態は、北側から調査区域に入りすぐに東へ屈曲して行くものである。断面はごく浅く、やや丸みを帯びた皿状を呈する。検出された部分の規模は長さは約3.8m、上面の幅は1.4～1.9m、底面の幅は1.2m～1.8m、深さは11～17cmを測る。東側の方が僅かに広がるようである。当初、遺構を確認した時点においては、平面プランから方形周溝基を想定して調査を進めていたが、深さが浅いことや覆土の質のちがいが、掘り方が異なることから溝として判断した。遺物の検出は少なかったが総数にして60点を数えるものであった。遺物としては古墳時代後期の土器小破片が検出されているが、図示し得るようなものは無かった。



第14図 第3・4・5・6号溝実測図



土 層 註 [第4号溝]

1. 明褐色土 黄褐色土粒子を少量、赤褐色粒子を微量、灰褐色土粒子を少量含む。粘性、弱。しまり、良。
2. 明褐色土 黄褐色土粒子を少量、赤褐色粒子を微量、灰褐色土粒子を少量含む。粘性、弱。しまり、良。
3. 明褐色土 黄褐色土粒子を多量、灰褐色土粒子を少量含む。粘性、弱。しまり、良。
4. 暗褐色土 黄褐色土粒子を少量、赤褐色粒子をごく微量含む。粘性、弱。しまり、良。
5. 暗褐色土 黄褐色土粒子を多量、黄褐色土ブロック(φ10~50mm)を多量、灰褐色粒子を多量、炭化物を少量含む。粘性、強。しまり、良。

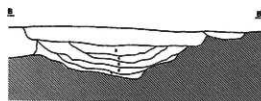
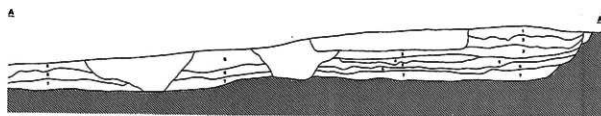
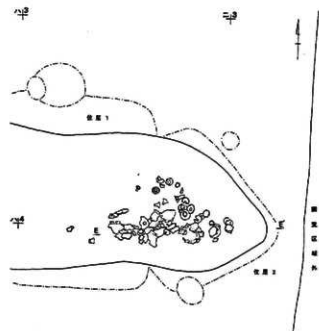
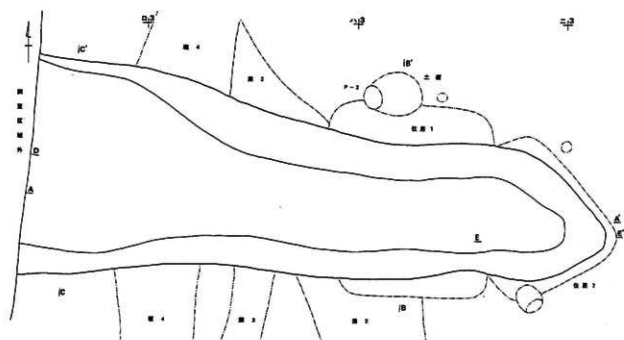
土 層 註 [第5号溝]

1. 明褐色土 黄褐色土粒子を多量(大きなものはブロック状に)、黒褐色土を多量含む。粘性、強。しまり、良。
2. 明褐色土 黄褐色土粒子をブロック状に多量、赤褐色粒子をごく微量、黒褐色土を多量含む。炭化物を微量含む。粘性、良。しまり、良。
3. 暗褐色土 黄褐色土粒子を少量、灰褐色土粒子をごく微量含む。粘性、良。しまり、良。
4. 明灰褐色土 黄褐色土粒子を多量含む。砂っぽくなっている。粘性、良。しまり、良。

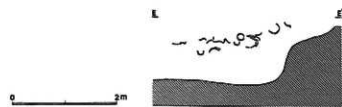
土 層 註 [第6号溝]

1. 灰褐色土 上層の畑の耕作土。
2. 黒褐色土 黄褐色土粒子を多量、黄褐色土ブロック(φ20~50mm)を少量、灰褐色土粒子をブロック状(φ10~20mm)多量含む。粘性、良。しまり、弱。

(3) 溝状遺構と出土遺物



第15図 溝状遺構実測図



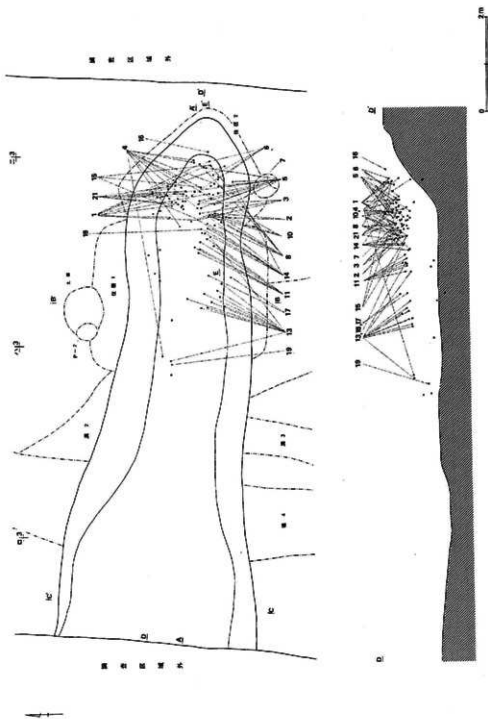
土層註

1. 暗褐色土 黄褐色土粒子を少量、赤褐色粒子を微量含む。粘性、良。しまり、良。
2. 黒褐色土 黄褐色土粒子少量、赤褐色粒子を微量、炭火物を微量含む。粘性、良。しまり、良。
3. 暗褐色土 黄褐色土粒子を少量、赤褐色粒子をごく微量、灰褐色土粒子をごく微量含む。粘性、良。しまり、良。
4. 暗褐色土 黄褐色土粒子を少量、赤褐色粒子を微量含む。鉄斑あり。粘性、良。しまり、良。
5. 灰黒褐色土 黄褐色土粒子を少量、赤褐色粒子を微量、灰褐色土粒子を微量、炭火物を微量含む。鉄斑あり。粘性、強。しまり、良。
6. 灰明褐色土 黄褐色土粒子を多量、灰褐色土粒子を微量、黒褐色土粒子を多量含む。鉄斑あり。粘性、強。しまり、良。

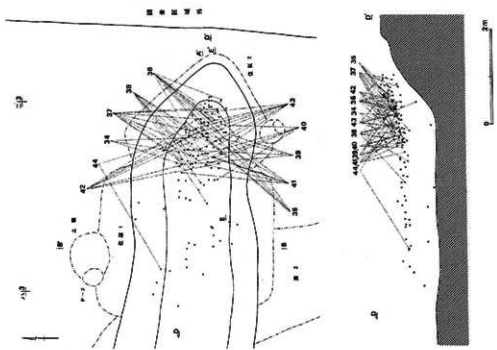
溝状遺構 (第15～18図)

調査区の中央イ〜ニ-3〜4グリッドに位置する。中央部の東側から西側に向けて直線的に構築されている。溝の起点は第2号住居跡と重なる位置から始まっており、西側を流れる上戸田川の流路に向けて幅を広げながら掘り込まれている。この遺構は、起点にあたる部分を中心にして、大量の土器が調査当初から出土しており、形態的には、溝として取り扱うべきものであるが、別の目的や用途、役割をもった遺構としてとらえ、敢えて溝状遺構として取り扱った。

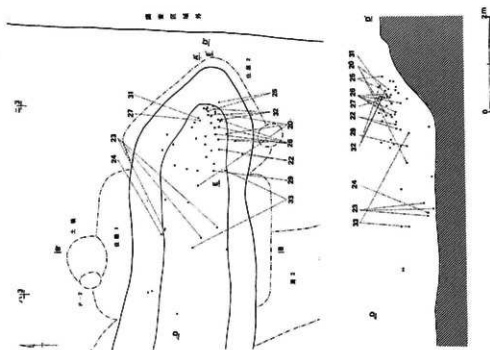
この溝状遺構は、起点部分において第2号住居跡と切り合い、続いて第1号住居跡、南北に構築される第2号溝、第4号堀と切り合っている。新旧関係は、第2号住居跡よりも新しく、他の遺構よりも本跡が古い。形態は、ほぼ直線的で低地部分に下がるにしたがって広がりをもつようである。断面は、起点部分においては、やや丸みを帯びるV字形を呈しているが、低地部分では平坦になってしまうようである。検出された部分の規模は、長さは約11.3m、上面の幅は2.5～4.2m、底面の幅は0.9m～3.6m、深さは95～120cmを測る。底面の傾斜は約25cm程である。軸偏差は、南北軸がN-85°-Wをとる。この遺構に関連した遺構は特になかった。遺物は、第2号住居跡から第1号住居跡と切り合う部分から折り重なるように、かなり多量に出土している。遺物のほとんどが一括的に投棄されたものであることが窺われる。ただし、壊れた土器がほとんどであるが、完形品に近いものも多く、溝の中にある一定の時間に投棄したものと理解できる出土状況であった。第16～18図において主な土器の出土状況を図示したが、平面図ではどれも離れたものが接合されており、断面図では第1層から第3層において遺物が多く集中している。検出された遺物については、ごく小破片を除いて出土地点を記録して取り上げを行っているが、総数にして441点を数えるものであった。主な遺物は、壺形土器 (No.1～6)、甕形土器 (No.7～15)、小型壺形土器 (No.16～19)、埴形土器 (No.25～33)、埴形土器 (No.20～24)、高坏形土器 (No.34～44) などである。



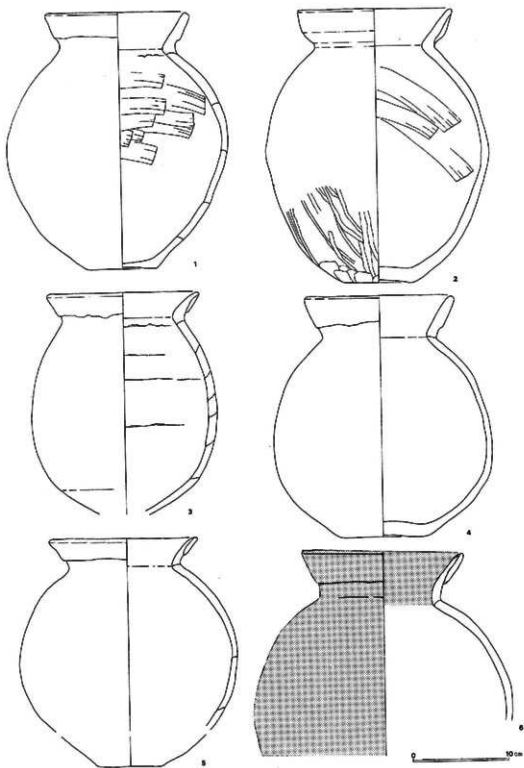
第16図 溝状遺構遺物出土位置図 (1)【壹・號】



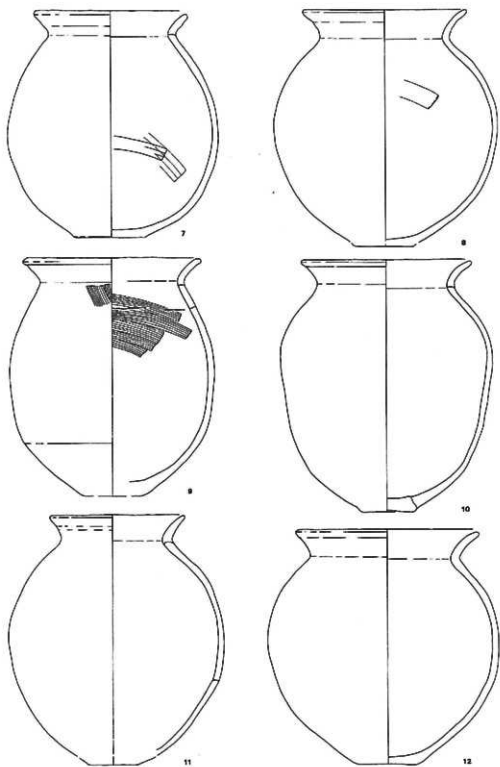
第18图 溝状遺構遺物出土位置図 (3)【高环】



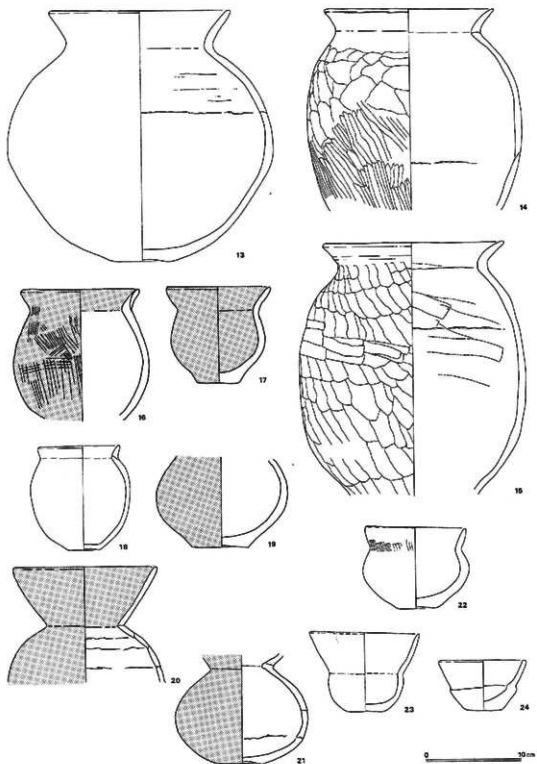
第17图 溝状遺構遺物出土位置図 (2)【坑・埧】



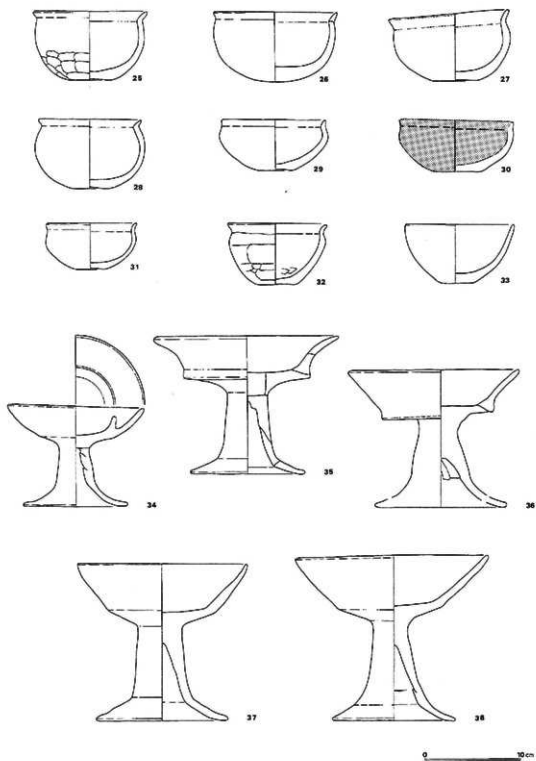
第19图 沟状遗构出土遗物实测图 (1)



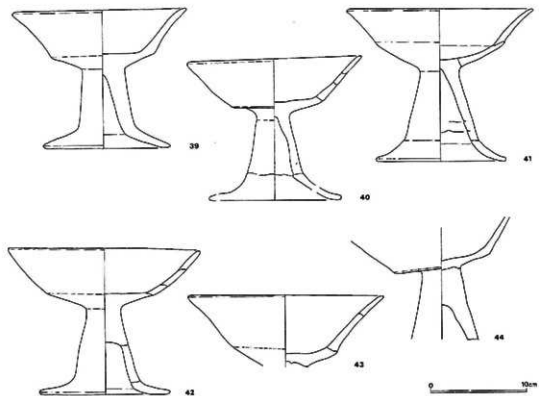
第20图 沟状遗構出土遺物実測図 (2)



第21图 沟状遺構出土遺物実測図 (3)



第22图 沟状遗構出土遺物実測図 (4)



第23图 沟状遺構出土遺物実測図 (5)

第5表 溝状遺構出土遺物 (1) (第19~23図)

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	壺	口径 (15.8) 胴径 (23.4) 底径 (7.4) 器高 (27.2)	複合口縁。胴上半部に最大径をもつが、肩の張りは弱く、頸部で細く収縮する。外面の口縁部ヨコナデ、胴部は刷毛整形後ナデ調整。内面はナデ調整、上半部にヘラナデ調整痕あり。外面の胴部中位に黒斑。残存、70%。	胎土 E微 GH少 F多 焼成 良好(やや堅緻) 色調 淡橙褐色	
2	壺	口径 (18.2) 胴径 (23.4) 底径 (7.4) 器高 (28.4)	複合口縁。胴部の張りは弱く長胴となる。最大径を中位にもつ。外面は刷毛整形後ナデ調整。底部付近から下半にかけてヘラケズリとヘラミガキを施す。内面は、丁寧なヘラナデ調整。胴部の平面にわたって黒斑あり。残存、65%。	胎土 EFH少 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
3	壺	口径 (16.0) 胴径 (19.8)	複合口縁。肩部の張りは弱く長胴。外面の口縁部ヨコナデ、胴部刷毛整形後ナデ調整を加える。内面の口縁部は刷毛整形後ナデ調整。胴部ナデ調整。胴部中央に黒斑あり。残存、60%。底部を欠損する。	胎土 EH少 F多 焼成 良好 色調 濃い橙褐色	
4	壺	口径 (15.8) 胴径 (22.6) 底径 (9.0) 器高 (25.5)	複合口縁。球形となる胴部。最大径を下半にもつ。調整等是不明瞭であるが、内外面の口縁部はヨコナデ調整痕がある。内面の下半に黒斑あり。残存、80%。	胎土 E少 FH多 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	
5	壺	口径 (15.7) 胴径 (22.9)	複合口縁。球形の胴部。中位に最大径をもつ。厚減著しく調整等不明瞭であるが、僅かながら口縁部にヨコナデ調整が残る。残存、70%。底部を欠損する。	胎土 H少 EF多 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	
6	壺	口径 (17.0) 胴径 (27.4)	複合口縁。頸部は収縮し、僅かに直立し外傾する。胴部は球形となる。不明瞭であるが、口縁部は内外面ともにヨコナデ調整。外面及び内面の口縁部に赤彩痕あり。残存、40%。	胎土 EH少 FG多 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	
7	壺	口径 (16.0) 胴径 (21.6) 底径 (7.6) 器高 (24.0)	短く「く」の字状に屈曲する口縁部。中位に僅かに稜をもつ。胴部は球形で、最大径は下半にある。外面は刷毛整形後ナデ調整、口縁部はヨコナデを加える。内面はナデ調整、部分的にヘラナデ痕あり。胴部下半から底部にかけて黒斑あり。残存、65%。	胎土 H少 F多 焼成 やや不良 色調 濃い橙褐色	
8	壺	口径 17.4 胴径 23.6 器高 (25.1)	「く」の字に屈曲する頸部、口縁部は外反するように短く開く。胴部は球形やや長胴。外面は不明瞭であるが、僅かにナデ調整痕あり、口縁部はヨコナデ調整。内面は丁寧なナデ調整。残存、60%。底部を欠損。	胎土 EHG少 F多 焼成 不良 色調 濃い橙褐色	

第6表 溝状遺構出土遺物 (2)

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
9	甕	口径 18.8 胴径 21.6 底径 5.2 器高 25.2	「く」の字に屈曲する頸部、口縁部は外反するようによく開く。器内は厚みもっている。胴部は長胴で、若干歪な感じを受ける。外面、口縁部はヨコナデ、胴部はナデ調整。頸部に微妙に刷毛整形痕。内面、口縁部はヨコナデ、胴部は上位部分に刷毛整形痕あり。残存、70%。	胎土 EH少 FG多 焼成 やや不良 色調 暗赤褐色	
10	甕	口径 17.8 胴径 22.4 底径 (5.2) 器高 (31.2)	「く」の字に屈曲する頸部、口縁部は短く開く。胴部は長胴となるが、肩部の張り強い。最大径は上半にもつ。内外面ともに不明瞭であるが外面の口縁部はヨコナデ、胴部は細かい刷毛整形後ナデ調整。内面はナデ調整。残存、60%。	胎土 E少 FH多 焼成 やや不良 色調 にぶい橙褐色	
11	甕	口径 14.3 胴径 22.7 器高 (25.8)	小さな頸部に口縁部が短く立ち上がる。内外面不明瞭であるが、口縁部はヨコナデ、胴部はナデ調整。内面の胴部に僅かにヘラナデ調整痕が見られる。残存、70%。底部を欠損。	胎土 E少 FGH多 焼成 やや不良 色調 にぶい橙褐色	
12	甕	口径 19.4 胴径 24.4 底径 8.3 器高 24.8	「く」の字に屈曲する頸部、口縁部は外反する。胴部は球形に近く、肩部が張る。最大径を中位にもつ。内外面ともに、口縁部はヨコナデ、胴部はナデ調整。残存、60%。	胎土 E少 FH多 焼成 やや不良 色調 にぶい橙褐色	
13	甕	口径 19.2 胴径 28.2 底径 6.3 器高 26.5	小さく収縮する頸部、口縁部は漏斗状に開く。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。不明瞭であるが、内外面ともに、口縁部はヨコナデ調整。外面の底部付近にはヘラケズリ痕あり。残存、35%。	胎土 D微 EH少 F多 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	
14	甕	口径 18.0 胴径 21.0	「く」の字に屈曲する頸部、口縁部は短く開く。肩部付近に沈線状の整形痕あり。球形に近い長胴となる。外面の上半にヘラケズリ痕を残し、その後下半部には、ヘラミガキを加える。口縁部にはヨコナデ調整を推す。内面はナデ調整。残存、70%。胴下半部及び底部を欠損する。	胎土 EH少 F多 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	
15	甕	口径 18.6 胴径 24.7	頸部は屈曲し、口縁部に向けて短く開く。肩部の張りは弱く、長胴となる。外面の胴部は細かい縦方向のヘラケズリ、中位部に横方向のケズリ加える。口縁部は丁寧なヨコナデ調整。内面の口縁部は丁寧なヨコナデ、胴部はナデ調整。一部にヘラナデ調整痕を残す。残存、70%。底部を欠損。	胎土 EH少 FG多 焼成 やや不良 色調 にぶい赤褐色	

第7表 溝状遺構出土遺物 (3)

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
16	小型壺	口径 12.6 胴径 14.4	広口の小型壺。胴部の張りは弱く、口縁部は短く外傾する。内外面ともに不明瞭であるが、外面は刷毛整形後、ナデ調整。内面は不明瞭であるが、ヘラナデ痕あり。内外面ともに口縁部にヨコナデを加える。外面の一部に黒斑あり。外面及び内面口縁部を赤彩。残存、口縁部40%。底部を欠損。	胎土 GH少 EF多 焼成 やや不良 色調 淡褐色	
17	小型壺	口径 10.8 胴径 10.0 底径 4.2 器高 10.3	小型の壺。平底の底部。小型であるが球形となる胴部。頸部で収縮し口縁部が開く。直径は胴部よりも口縁部の方が大きい。内外面ともにナデ調整後、口縁部はヨコナデを加える。赤彩痕あり。残存、60%。	胎土 EH少 FG多 焼成 良好 色調 淡褐色	
18	小型壺	口径 7.8 胴径 10.6 底径 3.4 器高 11.0	小型の壺。底部は微妙な上げ底となる。縦長の胴部で、頸部で僅かに収縮し口縁部は短く直立する。内外面ともに不明瞭であるが、刷毛目が残る。残存、80%。口縁部1/2を欠損。	胎土 DH微 F少 E多 焼成 不良 色調 淡褐色	
19	小型壺	胴径 13.9 底径 5.9	小さな底部。胴部の張りは強く、下半に最大径をもつようである。不明瞭であるが、外面はヘラミガキ調整。内面はナデ調整。外面のみ赤彩。残存、40%。胴下半より完存。	胎土 DH少 E多 焼成 良好 色調 淡褐色	
20	罎	口径 15.3 胴径 16.5	小さく収縮する頸部。口縁部は漏斗状に大きく開く。胴部は球形となるようである。内外面ともに不明瞭であるが、外面及び内面の口縁部に赤彩痕あり。内面に輪状痕を残す。残存、30%。胴下半部から底部を欠損。	胎土 EFH少 焼成 良好 色調 淡褐色	
21	罎	胴径 14.0 底径 4.5	小さく収縮する頸部。口縁部は漏斗状に大きく開くようである。胴部は僅かに扁平となる球形を呈する。底部は上げ底となる。内外面ともに不明瞭であるが、赤彩痕あり。残存、30%。口縁部を欠損。	胎土 F少 E多 焼成 やや不良 色調 淡赤褐色	
22	罎	口径 10.7 胴径 11.3 底径 4.1 器高 8.8	頸部は僅かに収縮し、口縁部は小さく外傾する。胴部は上半に最大径をもつ。内外面ともに不明瞭であるが、頸部に刷毛目が残る。残存、80%。	胎土 D微 EH少 F多 焼成 不良 色調 淡赤褐色	

第8表 溝状遺構出土遺物 (4)

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法的特徴	胎土・焼成・色調	備考	
23	埴	口径	11.6	頸部は僅かに収縮し、口縁部は大きく開く。体部は扁平で、底部は平底となる。不明瞭であるが、内外面にごく僅かに赤彩痕が残る。残存、80%。	胎土 H散 E少 F多 焼成 不良 色調 淡橙褐色	
		胴径	8.0			
		底径	4.2			
		器高	8.5			
24	埴	口径	9.4	小型の埴。頸部は僅かに収縮し、内面に線を作り出す。底部は平底となる。内外面ともにナデ調整。残存、70%。	胎土 E少 FH多 焼成 良好(堅緻) 色調 淡褐色	
		胴径	7.2			
		底径	3.6			
		器高	5.3			
25	埴	口径	12.0	頸部は、僅かに内面に線をもち収縮し、口縁部は短く外傾する。底部は微妙に上げ底となる。外面の胴下半部にヘラケズリ痕が残るが、内外面ともにナデ調整。残存、80%。	胎土 E H少 F多 焼成 やや不良 色調 にぶい赤褐色	
		胴径	11.6			
		底径	4.6			
		器高	7.3			
26	埴	口径	13.0	頸部は、僅かに内面に線をもち収縮し、口縁部は短く外傾する。底部は丸底となる。内外面ともにナデ調整。外面の下半はヘラケズリ後、丁寧なナデ調整。内外面ともに口縁部はヨコナデを加える。外面の底部に径7cmの黒斑あり。残存、85%。	胎土 E少 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
		胴径	12.7			
		器高	7.3			
27	埴	口径	12.8	扁平な胴部。口縁部は緩やかに短く外傾する。底部は平底となる。内外面ともに調整等は不明。残存、90%。	胎土 F H少 E多 焼成 やや不良 色調 淡褐色	
		胴径	12.3			
		底径	4.9			
		器高	7.6			
28	埴	口径	11.0	扁平に膨らむ胴部。頸部は内面に線をもち収縮し、口縁部は短く外傾する。底部は上げ底となる。内外面ともに調整等は不明。残存、70%。	胎土 H散 EF少 焼成 やや不良 色調 淡褐色	
		胴径	11.6			
		底径	3.6			
		器高	7.3			
29	埴	口径	11.1	底部から緩やかに立ち上がる胴部。頸部は内面に線をもち収縮しごく短く外傾する。底部は上げ底となる。内外面ともに調整等は不明瞭であるが、外面にはヘラケズリ痕が僅かにある。残存、90%。	胎土 H散 EF多 焼成 やや不良 色調 淡褐色	
		胴径	11.6			
		底径	3.6			
		器高	5.4			
30	埴	口径	12.0	底部から緩やかに立ち上がる胴部。頸部は内面に弱い線をもち収縮しごく短く外傾する。底部は上げ底となる。内外面ともにナデ調整後、赤彩する。外面の下半には不明瞭であるが、ヘラケズリ痕が僅かに見える。残存、80%。	胎土 E H少 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
		胴径	12.0			
		底径	5.0			
		器高	5.6			

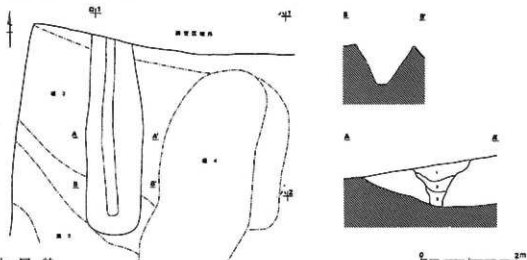
第9表 溝状遺構出土遺物 (5)

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
31	埴	口径 9.6 胴径 9.6 底径 3.2 器高 4.9	底部から緩やかな膨らみをもって立ち上がる胴部。頸部は僅かにくびれ、短く外反する。底部は上げ底となる。内外面ともに調整等不明瞭であるが、赤彩痕あり。残存、30%。	胎土 DE 敷 F 少 焼成 やや不良 色調 濃茶褐色	
32	埴	口径 10.5 胴径 10.2 底径 4.3 器高 6.5	底部から緩やかに立ち上がる胴部。頸部は僅かにくびれ、短く外反する。底部は小さく平底。外面の胴下半部はヘラケズリ調整。内面の胴部はヘラナデ調整。内外面ともにヨコナデを加える。内外面ともに赤彩。残存、40%。	胎土 DE 敷 FH 少 焼成 良好 色調 濃褐色	
33	埴	口径 10.6 底径 3.4 器高 6.7	小さな底部から緩やかな膨らみをもって立ち上がる胴部。口縁端部は丸く尖る。底部は小さく平底。内外面ともに丁寧なナデ調整。底部及び胴下半部に径8cm程の黒斑あり。残存、60%。	胎土 DE H 少 焼成 良好 色調 淡褐色	
34	高 埴	口径 14.6 脚径 11.2 器高 11.8	埴下半に微妙であるが稜をもち、内湾ぎみに立ち上がる。埴部内側に高さ約1.3cmの突起があり、口縁と同じように並行して一周している。脚部は接合部から柱状に下がり、裾に向かって緩やかに開く。内外面ともに丁寧なナデ調整を施す。残存、95%。	胎土 D H 少 F 多 焼成 良好 色調 濃茶褐色	
35	高 埴	口径 19.6 脚径 12.2 器高 14.6	埴部は明確な段をもって立ち上がり、大きく外反する。脚部は接合部から柱状に下がり、裾部に向かって緩やかに開く。外面の埴下半にヘラミガキ痕があるが、ほかはナデ調整。残存、45%。	胎土 H 敷 EF 多 焼成 良好 色調 淡褐色	
36	高 埴	口径 18.1 脚径 (13.8) 器高 14.6	大きな埴部。下半に明確な段を有し、底面は、平底となる。脚部は接合部から膨らみをもった柱状となり、裾に向かって緩やかに開く。内外面ともに不明瞭であるが、ナデ調整痕が残る。残存、70%。	胎土 E H 少 F 多 焼成 やや不良 色調 淡茶褐色	
37	高 埴	口径 17.9 脚径 14.0 器高 16.6	埴下半に稜をもち、口縁部に向かい微妙に内湾ぎみに開く。脚部は柱状となり、裾部で開く。調整等不明瞭であるが、脚端部にはヨコナデ調整あり。残存、40%。	胎土 E F 少 焼成 良好 色調 淡赤褐色	
38	高 埴	口径 20.3 脚径 13.0 器高 17.5	大きな埴部。下半に稜をもち、口縁部に向かい微妙に内湾ぎみに開く。脚部は柱状となり、裾部で小さく開く。調整等不明瞭であるが、脚部の柱状部には縦位にヘラケズリ痕が残る。残存、80%。	胎土 H 敷 E 多 焼成 やや不良 色調 淡褐色	

第10表 溝状遺構出土遺物 (6)

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
39	高 坏	口径 18.4 脚径 13.5 器高 14.8	坏部下半に稜をもち、口縁部に向かい大きく外反する。脚部は柱状となり、裾部で開く。調整等不明瞭であるが、口縁部の内外面にヨコナデ調整あり。内外面に赤彩痕。残存、60%。	胎土 E 微 F 少 焼成 良好 色調 淡赤褐色	
40	高 坏	口径 18.5 脚径 (14.0) 器高 15.2	坏部の下半に稜をもち、口縁部に向かい直線的に開く。脚部は小さな接点で坏部と接合されており、下に向かって開く柱状を呈している。内外面ともに調整等不明瞭。残存、70%。	胎土 F H 少 E 多 焼成 やや不良 色調 濃茶褐色	
41	高 坏	口径 19.4 脚径 13.6 器高 16.2	坏部の下半に稜をもち、口縁部に向かい緩やかに外反する。脚部は柱状を呈するが、やや膨らみをもち、裾部で開く。内外面ともに調整等不明瞭であるが、外面は細かい刷毛整形後、ナデ調整が施される。口縁部は内外面ともにヨコナデを施す。残存、65%。	胎土 D G H 少 F 多 焼成 やや不良 色調 濃橙褐色	
42	高 坏	口径 20.4 脚径 13.8 器高 15.6	坏部の下半に微妙な稜をもち、口縁部に向かい内湾ぎみに開く。脚部は柱状を呈するが、やや膨らみをもち、裾部で開く。内外面ともに調整等不明瞭である。残存、70%。	胎土 D H 微 E 多 焼成 やや不良 色調 濃橙褐色	
43	高 坏	口径 20.7	大きく深みのある坏部。下半に稜をもち、口縁部に向かい緩やかに外反する。外面はナデ調整後、下半の一部にヘラミガキ痕あり。内面においてもナデ調整後、下半にヘラミガキを施す。外面の側面及び内面の底部に黒斑あり。残存、坏部80%。脚部を欠損。	胎土 E F 少 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
44	高 坏		坏部の下半に稜をもち、口縁部に向かい直線的に開くようである。脚部は柱状を呈するが、裾に向かって開く。外面、坏部は丁寧なナデ調整。脚部はヘラケズリ後ナデ調整を施す。内面は剥落のため不明瞭。残存、坏部60%。上下端部を欠損。	胎土 F F 多 焼成 良好 色調 濃茶褐色	

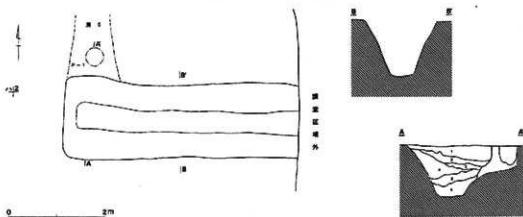
(4) 堀と出土遺物



土層註

1. 明褐色土 黄褐色土粒子を少量、赤褐色粒子を微量、灰褐色土粒子を一様に少量含む。粘性、弱。しまり、良。
2. 明褐色土 黄褐色土粒子を多量、赤褐色粒子を少量、灰褐色土粒子を少量含む。鉄斑あり。粘性、良。しまり、良。
3. 暗褐色土 黄褐色土粒子を一様に多量、部分的にブロック化している。赤褐色粒子を少量、灰褐色土粒子を多量含む。鉄斑あり。粘性、強。しまり、良。

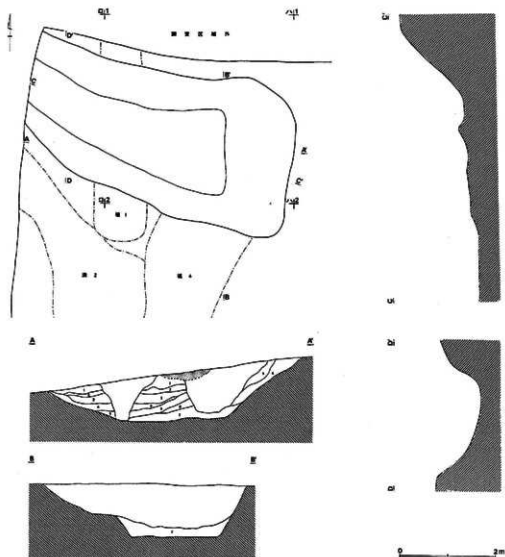
第24図 第1号堀実測図



土層註

1. 明褐色土 黄褐色土粒子を多量、赤褐色粒子を微量、灰褐色土粒子を多量、白色微粒子を多量含む。粘性、弱。しまり、良。
2. 暗褐色土 黄褐色土粒子を微量、赤褐色粒子を微量、灰褐色土粒子を多量、白色微粒子を少量含む。粘性、良。しまり、良。
3. 暗灰褐色土 黄褐色土粒子を多量、黄褐色土ブロック(φ20~30mm)を多量、灰褐色土粒子を多量含む。鉄斑あり。粘性、良。しまり、良。
4. 明灰褐色土 黄褐色土粒子を多量、赤褐色粒子を微量、灰褐色土粒子を多量、黒褐色土を少量含む。炭化物、鉄斑あり。粘性、良。しまり、良。
5. 明灰褐色土 黄褐色土粒子を多量、黄褐色土ブロック(φ10~30mm)を多量、灰褐色土粒子を多量含む。粘性、強。しまり、良。
6. 明灰褐色土 黄褐色土粒子を多量、黄褐色土ブロック(φ10~30mm)を多量、灰褐色土粒子を多量、黒褐色土を微量含む。粘性、強。しまり、強。

第25図 第2号堀実測図



土層註

1. 明褐色土 黄褐色土粒子を多量、黄褐色土ブロック(φ30mm)を少量、赤褐色粒子を微量、灰褐色土粒子を多量、黒褐色粒子を多量含む。粘性、良。しまり、良。
2. 明褐色土 黄褐色土粒子を多量、灰褐色土粒子を多量、黒褐色土粒子を多量含む。粘性、良。しまり、良。
3. 明灰褐色土 黄褐色土粒子を多量、部分的にブロック化している。黒褐色土を少量含む。鉄斑あり。粘性、強。しまり、良。
4. 黒褐色土 黄褐色土粒子を少量、黄褐色土ブロック(φ10~30mm)を多量、灰褐色土粒子を少量含む。粘性、良。しまり、良。
5. 暗灰褐色土 黄褐色土粒子を少量、赤褐色粒子を微量、灰褐色土粒子を微量含む。粘性、強。しまり、良。
6. 明灰褐色土 黄褐色土粒子を多量、黄褐色土ブロック(φ30~50mm)を多量、灰褐色土粒子を多量、黒褐色土を多量含む。鉄斑あり。粘性、強。しまり、良。
7. 明灰褐色土 黄褐色土粒子を多量、灰褐色土粒子を多量、黒褐色土粒子を微量含む。鉄斑あり。粘性、強。しまり、良。

第26図 第3号堀実測図

第1号堀 (第24図)

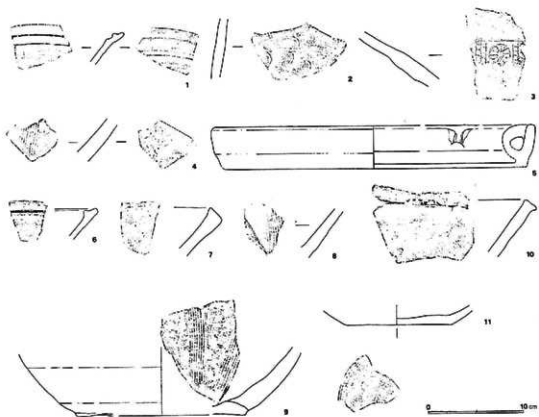
調査区の北側ロー1～2グリッドに位置し、北側の調査区域外から南に向けて直線的に掘られている。北側から掘り込まれてきており、約4m程のところで止まってしまっている。検出した部分は南端の僅かな部分である。第3号堀と直行するように切り合っているが、本跡の方が新しい。形態はほぼ直線的で、断面は底面が平坦になるV字形を呈する。箱葉研掘である。遺構確認面における検出された部分の長さは約4.2m、幅は上面において0.8～1.2m、底面においては0.2～0.3m、深さは北側が浅く82～98cmを測る。軸偏差は、南北軸がN-0°-Wをとる。遺物は、グリッドごとに区分して一括して取り上げた。図示できたものでは、古瀬戸の盤(No.1)や瓶子(No.2)常滑系の甕(No.3)、瀬戸美濃系の播鉢(No.4)が出土している。

第2号堀 (第25図)

調査区の北東側ハ～ニ2グリッドに位置し、東側の第2次調査区域の方向から直線的に掘られている。西側では第5号溝と切り合い、東側では調査区域外となる。この堀についても、調査区域に約5mのところまで止まってしまっている。検出した部分は西端の僅かな部分であるが、第2次調査の地点からは検出されていない。第5号溝と切り合っているが、本跡の方が新しい。形態は、ほぼ直線的で、断面は底面がやや丸くなるU字形を呈するものである。遺構確認面における検出された長さは約5.0m、幅は上面において1.5～1.8m、底面においては0.5～0.6m、深さはほぼ平坦で110cmを測る。軸偏差は、南北軸がN-90°-Wをとる。遺物は、グリッドごとに区分して一括して取り上げた。図示できたものは、瀬戸美濃系の盤(No.6)や播鉢(No.8)、常滑系の播鉢(No.7・9)等である。なお、この遺構の東側については第2次調査を行っているが、そのときには堀跡は検出されておらず、調査区域外において立ち上がってしまっているものか形状について不明な点を残している。

第3号堀 (第26図)

調査区の北西側イ～ロー1～2グリッドに位置し、西側は調査区域外となってしまうが東西方向に掘られている。堀の中ほどでは第1号堀と、東端の部分では第4号堀と切り合っている。他の遺構よりも本跡の方が古い。西側においては、徐々に細く浅くなり、調査区域外に至っては低地部分になってしまうようである。形態は幅が広く、断面は底が平坦となる皿状を呈する。遺構確認面における検出された長さは約5.8m、幅は上面において2.0～3.2m、下面においては0.9～2.0m、深さは約135cmを測る。西側に向かって細く、深くなっている。軸偏差は、南北軸がN-65°-Wをとる。遺物は、グリッドごとに区分して一括して取り上げた。図示することができたものは、常滑系の片口鉢(No.10)等である。



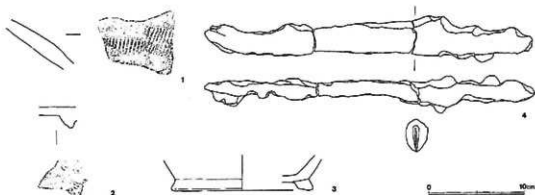
第27図 第1・2・3号掘出土遺物実測図

第11表 第1・2・3号掘出土遺物 (1) (第27図)

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	盤		古瀬戸。口縁部の破片。口縁直下にかえり状の突起をつくり出す。	胎土 F 微 焼成 良好 色調 淡灰褐色	掘 1
2	甌子		古瀬戸。胴下半部の破片。外面には「印花文」を施文する。灰釉の痕跡はあるが、剥離しており残っていない。	胎土 F 少 焼成 良好 色調 淡灰褐色	掘 1
3	壺		常滑系。壺の胴肩部片。押印あり。	胎土 F 少 H 多 焼成 堅緻 色調 濃灰褐色	掘 1
4	播鉢		瀬戸美濃系。胴下半部片。轆轤整形で内外面に鉄釉を施す。節目は日本単位とする。	胎土 F H 少 焼成 堅緻 色調 濃茶褐色	掘 1
5	内耳土器		口縁部の把手部分。体部は、底部から傾斜し短く直立する。口縁部直下に内耳をつける。残存、5%。	胎土 A F 少 焼成 やや不良 色調 淡灰褐色	掘 2

第12表 第1・2・3号掘出土遺物 (2)

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
6	盤		瀬戸美濃系。口縁部の破片。口縁直下に突起をつくり出す。内外面ともに鉄軸を施す。残存、口縁部5%。	胎土 AF微 焼成 良好 色調 淡褐色	掘 2
7	播鉢		常滑系。口縁部の破片。内外面に鉄軸を施す。節目は確認できるかぎりで7本である。残存、口縁部5%。	胎土 FH少 焼成 堅緻 色調 淡灰褐色	掘 2
8	播鉢		瀬戸美濃系。胴部の破片。轆轤整形で鉄軸を施す。節目は、確認できるかぎりで9本である。残存、胴部5%。	胎土 AF少 焼成 良好 色調 灰褐色	掘 2
9	播鉢	底径 (18.0)	常滑系。底部の破片。轆轤整形で、内外面に鉄軸を施す。節目は8本単位とする。残存、底部10%。	胎土 FH少 焼成 堅緻 色調 淡灰褐色	掘 2
10	片口鉢		常滑系。口縁部の破片。端部に平坦面をつくり出している。残存、口縁部10%。	胎土 AH少 焼成 堅緻 色調 濃茶褐色	掘 3
11	壺	底径 10.6	平底となる底部の破片。底面には糸切り離し痕あり。内外面に自然軸がかかる。残存、底部20%。	胎土 F多 焼成 堅緻 色調 灰褐色	掘 3



第28図 第4号掘出土遺物実測図

第4号堀 (第29図)

調査区の中央やや西側イ〜ロー1〜6グリッドに位置し、ほぼ南北に構築されている。北側部分においては第3号堀との交点で立ち上がってしまう。この遺構は切り合いが多く、南から第3号溝と接しながら並列し、溝状遺構や第2号溝と直交にちかく交差している。切り合う各遺構との新旧関係は、どの遺構よりも本跡が新しいものである。形態はほぼ直線的で、断面は底面が丸くなるV字形を呈する。遺構確認面における検出された長さは約21.3m、幅は上面において0.9〜2.0m、底面においては0.3〜1.0m、深さは西側が浅く120cmを測る。北から南に向かうにしたがって細くなるようである。軸偏差は、北側の部分において南北軸がN-20°-Eをとる。遺物は、グリッドごとに区分して一括して取り上げた。この遺構においては鉄製品(No.4)を壁面に接して検出している。製品の形状は錆びが酷く不明瞭であるが、小刀などの刃物と想像できる。その他図示することができたものは、常滑系の甕(No.1)、古瀬戸の甕(No.2)などである。

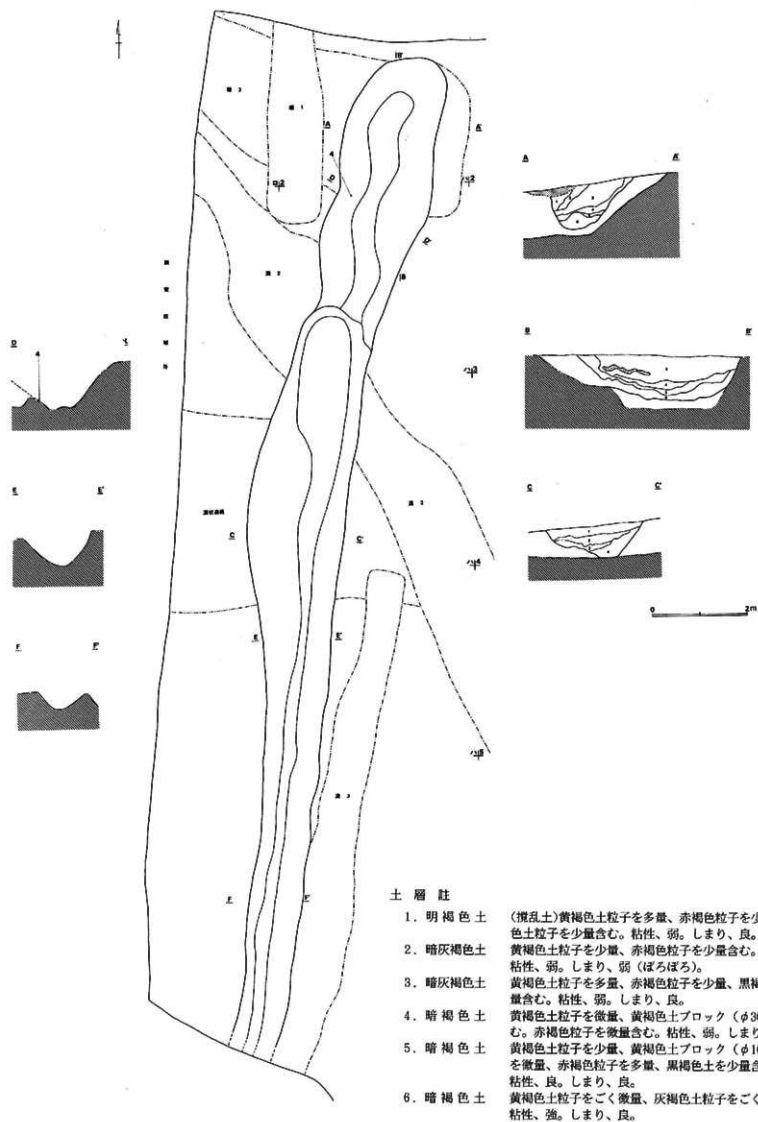
第13表 第4号堀出土遺物 (第28図)

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕		常滑系。甕の胴腹部の破片。格子状の押印あり。残存、胴腹部5%。	胎土 A少 F多 焼成 堅緻 色調 淡灰褐色	
2	盆		古瀬戸。盆の底部及び脚部。獣足のような脚が着く。脚部の先に指を表現したものと思われる刺突がある。残存、底部10%。	胎土 F少 焼成 良好 色調 淡灰褐色	
3	長頸壺	高台径(15.2)	須恵器。底部の破片。底面に幅約10mmの高台が貼り付けられる。高台は「ハ」の字状となる。残存、底部20%。	胎土 F多 焼成 堅緻 色調 灰褐色	

第14表 第4号堀出土鉄製品 (第28図)

(単位 cm)

番号	種類	長さ	幅	厚さ	重さ(g)	備考
4	短刀(?)	(34.8)	3.5	2.3	390	割れ口断面には、刃部が辛うじて見えている。



第29図 第4号畑実測図

(5) その他の遺構と出土遺物

調査区の南側には井戸跡が、北側には土壇やピットが確認されている。それぞれに独立したものであるが、以下に説明を加えたい。

井戸跡 (第30図)

調査区の南側ハ－5グリッドに位置する。第2・4号溝と切り合い構築されている。切り合う他のどの遺構よりも新しい。規模は短軸1.6m、長軸1.7m、深さは確認部分まで1.6m。形態はほぼ円形である。覆土の状況は確認面から約1.1mのところ第5層の黄褐色粘土をブロック状に積めており、自然堆積というよりも廃棄したような状況であった。遺物等の検出は無く、時期の推定はできなかった。

土壇 (第30図)

調査区の北側ハ－3グリッドに位置する。第1号住居跡と切り合っている。新旧関係は、住居跡の方が古く、本跡の方が新しい。規模は長軸1.1m、短軸0.8m、深さは19cmである。形態は底面が皿状になる楕円形を呈する。時期については、検出された遺物は少ないが、覆土中より陶器片の中に瀬戸美濃系の天目茶碗の破片(№1)が出土している。

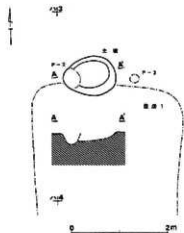
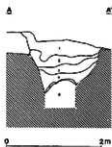
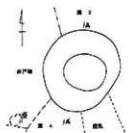
ピット (第30図)

調査区内から、ピットが7カ所検出されている。大きさは、それぞれ直径約20～50cm程である。掘立柱建物などと結びつくような配列は見られなかった。それぞれの形態や規模は第14表のピット一覧表のとおりである。

第15表 ピット一覧表 (第30図)

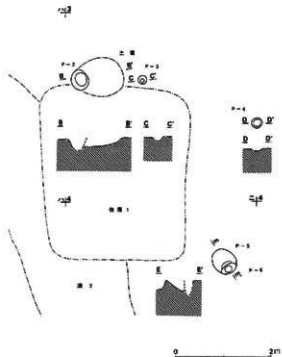
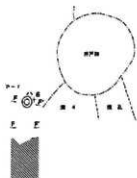
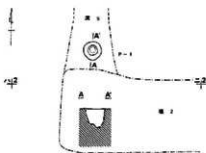
単位 cm

番号	グリッド	形態	長軸	短軸	深さ	底面径	備考
1	ハ - 1	円形	39	38	40	凹状	
2	ハ - 3	不整楕円形	48	38	18	フラット	
3	ハ - 3	円形	22	19	10	フラット	
4	ハ・ニ - 3	円形	23	23	8	フラット	
5	ハ - 4	楕円形	56	48	24	フラット	
6	ハ - 4	不整楕円形	34	19	32	フラット	
7	ロ - 5	円形	22	20	44	フラット	



土層註

1. 明褐色土 黄褐色土粒子を多量、赤褐色粒子を微量、灰褐色土粒子を少量含む。粘性、沉、しまり、良。
2. 明褐色土 黄褐色土粒子を多量、黄褐色土ブロック（φ10～30mm）を多量、赤褐色粒子を微量含む。粘性、弱、しまり、良。
3. 暗褐色土 黄褐色土粒子を微量、赤褐色粒子を微量含む。粘性、良、しまり、良。
4. 暗褐色土 黄褐色土粒子を多量、黄褐色土ブロック（φ10～30mm）を少量含む。粘性、良、しまり、強。
5. 黄褐色粘土 黄褐色粘土をブロック状に積んでいる。鉄塊あり。
6. 黒褐色土 黄褐色土粒子を少量含む。粘性、強、しまり、良。



第30図 井戸跡・土壇・ピット実測図



第31図 土壌出土遺物実測図

第16表 土壌出土の遺物（第31図）

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	碗	口径 (10.4)	瀬戸美濃系。天目茶碗と思われる。口縁部と胴部の小さな破片を2点。接合はしないが、同一の個体であろうか。胴部下半まで鉄軸を施す。(復元実測)	胎土 F少 焼成 良好 色調 灰褐色	

(6) グリッド出土の遺物

遺構に伴わない遺物としてグリッド単位で取り上げを行ったものである。基本土層中の第3層である暗褐色土層から出土したものである。



第32図 グリッド出土遺物実測図

第17表 グリッド出土の遺物（第32図）

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	碗	高台径 4.6	古瀬戸。灰軸平碗の底部破片。回転糸切り後、中央部を削り出し高台とする。残存、底部のみ90%。	胎土 F少 焼成 良好 色調 淡灰褐色	

6 ま と め

今回の第3次調査によって検出された遺構をまとめると、古代については弥生時代後期後半から古墳時代前期前半に位置づけられる溝が1本と、古墳時代中期から後期前半の住居跡を2軒、多量の土器を出土した溝状遺構が1カ所である。さらに時代が下って中世の14世紀後半から15世紀に比定される堀が4本である。ここでは、主な遺構である第1号溝と住居跡、溝状遺構について若干の説明を加え、まとめとしておきたい。

まず溝であるが、この遺構は第2次調査地点からの続きであり南側に延びるものとなった。掘り方の断面形態や、遺物の検出状況などから環濠としても取り扱われるものとして理解できる。同じ微高地上に立地する鍛冶谷・新田口遺跡などの周辺遺跡を含めてもこの遺跡だけに見られるものである。住居との関係などを見てゆくと、南西方向は上戸田川の元の流路として考えられる低地域になってしまい斜方向に流れ込むようで、溝としての役割を考えさせるものである。時期については、弥生時代後期後半の前野町期から古墳時代前期初頭の五領期の所産として捉えておきたい。

次に住居跡であるが、出土品が少なく不明なところが多いが、溝状遺構との切り合いから古墳時代中期から後期前半のものであろう。この遺跡からは、古墳時代後期前半の住居跡は第1次調査において2軒が検出されている。いずれもカマドを有するものである。

最後に溝状遺構についてであるが、この遺構からは多量の土器を検出している。遺構の掘り方や形態と遺物の出土状況との関連性はあまり考えられないが、出土状況については平面図や断面図の様子などから一括に投棄された状況が窺えるものである。壺や甕などは比較的上層から中層まで個体の形態を残したままのものが破片とともに投棄されており、また高坏や碗や坏などは中層から破損した状況で混入していた。中でも高坏の割合が多く、破損を受けたものがほとんどで完形品は少なかった。坏部や脚部のみ、あるいは破片など図示できなかったものも数多く検出している。時期については、古墳時代中期の和泉期から古墳時代後期前半の鬼高期にかけての時期として捉え、5世紀中葉の所産として考えられる。以上である。

[参考文献]

- 戸田市史編さん室「戸田市史 資料編Ⅰ」 戸田市 1981
西口 正純「鍛冶谷・新田口遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第62集
(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1986
比田井克仁「南関東五世紀土器考」『史蹟』第20号 1988
尾形 則敏「志木市遺跡群Ⅱ」 志木市の文化財第25集 志木市教育委員会 1997

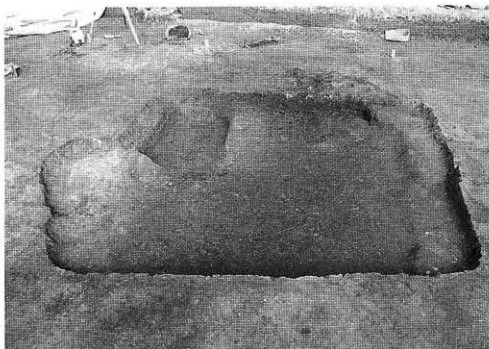


(1) 上戸田本村遺跡Ⅲの位置



(2) 調査区域全景

図版 2



(1) 第1号住居跡(西から)



(2) 第1号住居跡焼土検出部分(南から)



(1) 第1号溝 (北上から)



(2) 第1号溝 (東から)



(3) 遺構断面 (SPA-A'、中は第2号溝)



(4) 土器出土状況 (南側部分)



(5) 土器出土状況 (第10図-1他)

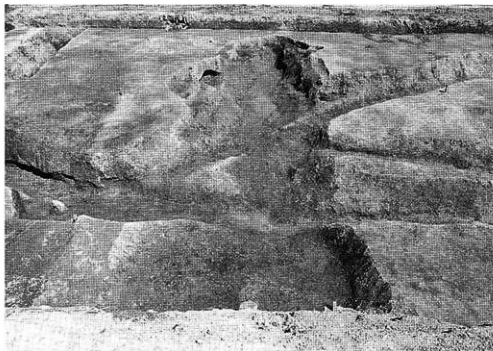
図版 4



(1) 第2号溝 (北から)



(2) 第6号溝 (南上から)



(1) 溝状遺構 (西から)



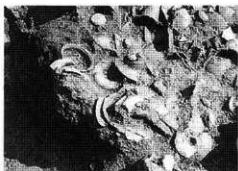
(2) 土器出土状況 (上から)



(3) 土器出土状況 (南から)

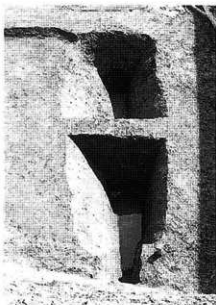


(4) 土器出土状況 (上から)



(5) 土器出土状況 (上から)

図版 6



(1) 第1号堀
(北から、中ほどは土層図用ベルト)



(2) 第2号堀 (東から)



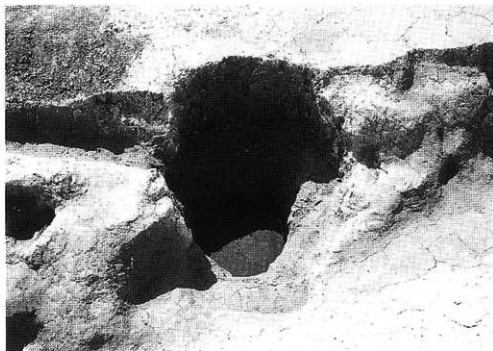
(3) 第3号堀 (西から)



(2) 鉄製品出土状況



(1) 第4号堀(北から)



(3) 井戸跡(東から)

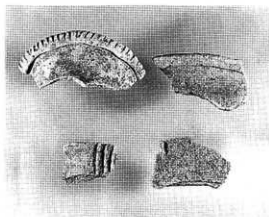
图版 8



(1) 第1号住居跡出土遺物 (第7図-2)



(2) 第1号溝出土遺物 (第10図-1)



(3) 第1号溝出土遺物 (第10図-2~5)



(4) 第1号溝出土遺物 (第11図-11)



(5) 第1号溝出土遺物 (第11図-13)



(6) 第1号溝出土遺物 (第11図-16)



(1) 沟状遗構出土遺物 (第19図-1)



(2) 沟状遗構出土遺物 (第19図-2)



(3) 沟状遗構出土遺物 (第19図-4)



(4) 沟状遗構出土遺物 (第19図-5)



(5) 沟状遗構出土遺物 (第19図-6)



(6) 沟状遗構出土遺物 (第20図-7)

図版10



(1) 溝状遺構出土遺物 (第20図-8)



(2) 溝状遺構出土遺物 (第20図-9)



(3) 溝状遺構出土遺物 (第20図-10)



(4) 溝状遺構出土遺物 (第20図-11)



(5) 溝状遺構出土遺物 (第20図-14)



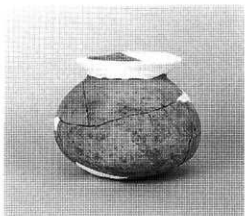
(6) 溝状遺構出土遺物 (第20図-15)



(1) 沟状遗構出土遺物 (第21図-17)



(2) 沟状遺構出土遺物 (第21図-20)



(3) 沟状遺構出土遺物 (第21図-21)



(4) 沟状遺構出土遺物 (第21図-22)



(5) 沟状遺構出土遺物 (第21図-23)



(6) 沟状遺構出土遺物 (第21図-24)

图版12



(1) 沟状遺構出土遺物 (第22図-25)



(2) 沟状遺構出土遺物 (第22図-27)



(3) 沟状遺構出土遺物 (第22図-28)



(4) 沟状遺構出土遺物 (第22図-29)



(5) 沟状遺構出土遺物 (第22図-31)



(6) 沟状遺構出土遺物 (第22図-33)



(1) 沟状遗構出土遺物 (第22図-34)



(2) 沟状遺構出土遺物 (第22図-36)



(3) 沟状遺構出土遺物 (第22図-38)



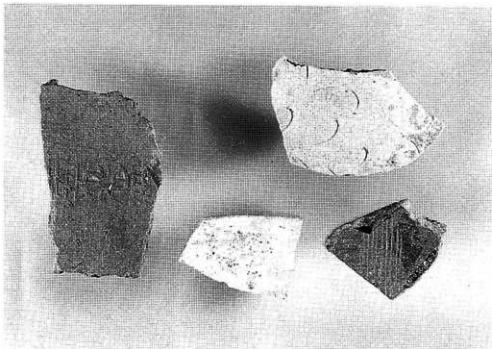
(4) 沟状遺構出土遺物 (第23図-39)



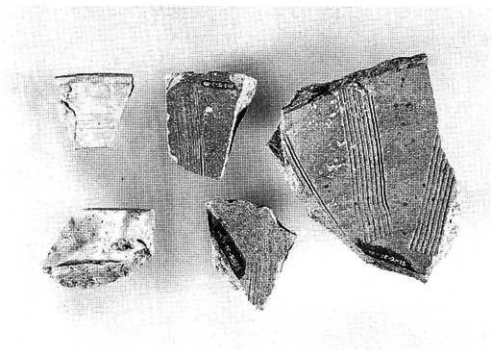
(5) 沟状遺構出土遺物 (第23図-40)



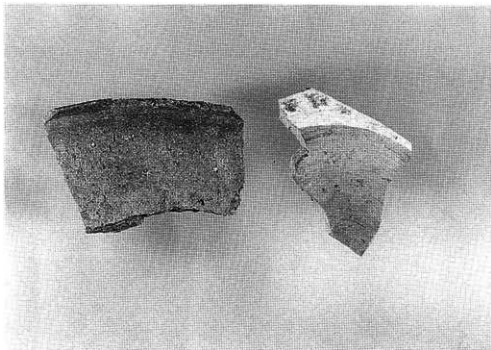
(6) 沟状遺構出土遺物 (第23図-41)



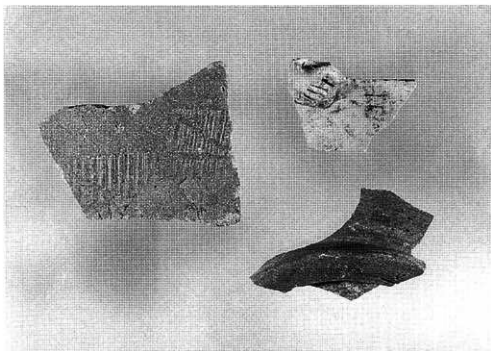
(1) 第1号掘出土遺物(第27図-1~4)



(2) 第2号掘出土遺物(第27図-5~9)



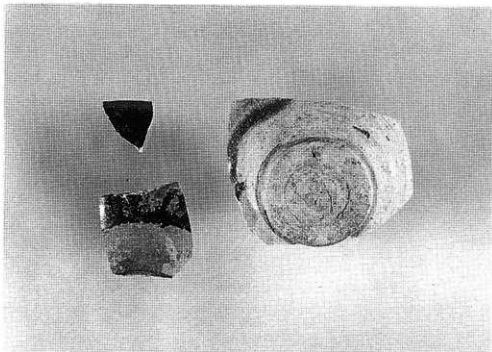
(1) 第3号掘出土遺物(第27図-10・11)



(2) 第4号掘出土遺物(第28図-1~3)



(1) 第4号掘出土鉄製品(第28図-4)



(2) 土壌・グリッド出土遺物(第31図-1、第32図-1)

報告書抄録

フリガナ	カミトダホンムライセキ							
書名	上戸田本村遺跡Ⅲ(第3次)							
副書名				巻次				
シリーズ	戸田市遺跡調査会報告書				巻次	第7集		
編著者	小島清一							
編集機関	戸田市遺跡調査会							
所在地	〒335-8588 戸田市上戸田1-18-1 ☎048-441-1800							
発行日	1998(平成10年)3月27日							
フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード 市町村 遺跡		北緯 (°'")	東経 (°'")	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
カミトダホンムラ 上戸田本村 遺跡 (第3次)	トダホンムラ 戸田市本町 3丁目6番8号	11224	006	35°48' 3"	139°40'55"	平成7年 3月1日 ? 平成7年 4月21日	292.80 試掘調査 (2,212.55)	共同住宅建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
上戸田本村 遺跡 (第3次)	集落	弥生～古墳 時代	住居跡 溝	2軒 2本	土器 第1号溝については 土器多数 土器多数		土器が一時期に廃棄されたような状態で検出。	
		中世	堀	4本	陶器(古瀬戸、常滑系、 瀬戸美濃系など)			
		時代不詳	井戸 溝 ピット	1カ所 4本 12カ所				

上戸田本村遺跡Ⅲ

埼玉県戸田市遺跡調査会報告書 第7集

発行日 平成10年3月27日

発行 戸田市遺跡調査会
戸田市上戸田1-18-1
戸田市教育委員会内

印刷 榎石井印刷所
蕨市錦町2-6-1

